伸びゆく螺旋

漣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
伸びゆく螺旋

【Ｎコード】
Ｎ６２５９Ｘ

【作者名】
漣

【あらすじ】
一条律己と言います。気がついたら死んでました。
神様から愛され、気がつくと色々な人からも愛されてしまうリツキ。
死後、休息と称されて別の世界へと預けられる事となる。
新しい生活は楽しいものですか？

1　話（前書き）

この作品には〔残酷描写〕〔１５歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現〕が含まれています。
１５歳未満の方はすぐに移動してください。
また［性］に対する免疫がない方、あるいは［性］の苦手な方はご注意ください。

1話

軽く、ため息をつく。

天井近くに浮いている青年は、床に横たわる自分自身を見つめていた。

ただ眠っているだけに見えるその姿。

けれど、もうその肉体はもう生命活動を終えている。

『呆気ないもんだねぇ……』

ぼそりと思う。

朝、バイトから戻ってご飯食べて片付けしてお風呂済ませて本読んで寝る……という、いつもの生活。

いつもとちょっと違った事といえば、少しだけなんか息苦しい感覚があっただけ。

気が付くと宙に浮いていた。

一度布団の中の自分に近寄ってみたけど、胸の上下運動とかないし、呼吸音とかもない。

時計の音とかはしっかり聞こえてるのにな。

一応触ろうとしてはみたんだけど、すり抜けてしまった……おおぅ。

『これはもう死んでるね、うん。まぁ突然死みたいなもんかな？

痛みとか苦しさとかなかったから良しとすべきなんだろうなぁ……』

俺、一条（いちじょう）律己（りつき）は再度ため息をついた。

どっちかというと、まぁ貧乏な部類の家庭に生を受けた。
両親とも家飛び出して十代で結婚して、まもなく俺が生まれてっていうそんな環境。
若いからとか考えなしだとか言われたくなくて、最初の頃はそこそこ頑張ってたらしいけど、何分二人とも遊びたい盛りのお年頃。
二人ともがイロイロとやりたい事をやり始めてしまったものだから、後はもうドロドロに。
早く言えば二人とも別々に浮気とかして結局五歳の頃、母親の方が新しい恋人を選んで、父親と俺置いて家を出ちゃって。

物心ついた頃には母親からも父親からも「お前さえ生まれなければ」って言われてたし、蹴られたり殴られたりもした。
母親が居なくなった後も、このままだと父親にも捨てられるのかな？　それとも殺されるのかな？　って、何かぼんやり考えてた記憶がある。
出来るなら捨てられないように、そして叶うなら殺されないように父親の機嫌を窺いながら、自分の事は自分でやって家事とかも頑張って覚えて、十歳の頃には一通りの事は出来るようになっていた。

けど。
あまり優しくなかった父親も挫折したのか何なのか、中学の入学時に唐突に鍵を渡された。
義務教育終わるまでは金の面倒見てやる、アパート借りてやるから一人で暮らせ、って。
「わかった」って頷いたけど、アパートに引っ越した後で何度か泣いた。

義務教育終えて、奨学金で高校行って。そこまでは一応俺にも父親が居た。
でも高校を卒業と同時に父親は俺と縁を切る事を選んだらしい。
「ここまで育ったんだから、後は自分で何とかして生きろ」って。
そう言って、俺の前から姿を消した……父親にとっての新しい家族を伴って。

一人になって仕送りも止まったけど、その時点で何とか就職も決まっていたのでアパートの大家とも話をつけ、このアパートに住み続ける事ができた。
色々とあったけど、これからの新しい生活に期待しながら生きようと思った。

就職先は一年で倒産した。
全国的に不景気だから、仕方ないっちゃ仕方ない。
バイトバイトで食いつないできた。

恋とか出会いとか、そんな事考えるゆとりはなかった。
現実は厳しいって事、よーく知ってるから。
そういうのは、本やゲームや想像だけでも楽しめるから。
夢とか希望とかないワケじゃないけど、過度な期待とかはしない。

生きていけるだけでいい。
そう思うようになったのは何時からだろうか。

ぼんやりとこれまでの二十二年の人生を振り返っていると、視界が変わった。

ついさっきまで部屋の中に浮いていた筈なのに、今は霧の中にいるような、白っぽい空間だった。
重力みたいなものがあるのか、足が地についている感覚がある。
漫画とか小説だと、ここで出てくるのは大抵カミサマなんだが……

「はい」

やっぱり出た。なんか光の塊みたいなの。

「お化けみたいな言い方だね」

いや、だって……ねぇ？　あれだけ色んな情報があっても、こればっかりは死ぬとか夢の中とかでしか有り得ないから確認しようもないし。

「驚かないのはその手の予備知識のせい？」

まぁそんなところです。心読んでるくらいだからお分かりでしょ？

「読んでるっていうか、君がこちらに意識を向けて思ってるからダダ漏れになってるの」

さいですか。まぁカミサマだから隠し事なんてしても無駄なんでしょ？

「うん。でもきちんと口で会話してほしいな、とは思う」

「そういうものなんですかね、カミサマ達の考えなんてパンピーの俺にはさっぱりですが」

口を使って会話しはじめた俺の前の光の塊はヒトの形へと変わる。

白い服。白っぽい髪と陶器のような肌と太陽のような黄色っぽい瞳。
自分と同じ年齢くらいにも見えるが、声は凛として高いし性別もよくわからない。
綺麗なのでどっちでもいいか。綺麗なものは好きだし。

「いいイメージ力だね、悪くない」

カミサマはそう言って笑みを浮かべた。

「君の目の前にあるこの姿は、君自身が持つ神のイメージ。ちなみに以前魔女信仰とかやってた人が作り出した私のイメージは黒ヤギ頭でしたよ？」

「バフォメットですか」

想像して思わず苦笑してしまった。
何でもアリだなカミサマ。

「で？　これから俺はどうなるんです？」

気分のいいうちに聞いておきたい。
覚悟なんてもう、とうに出来てるから。

「人生振り返ってみても特にいい事とかしてないから天国なんて無理だろうし、ああいう人生だったって事も多分、俺自身が全部悪いんですよね？　よくある前世とかで誰かを苦しめたとか、そんな絡みでの罰というか業なんだろうな、ってずっと考えてたから……」

カミサマは何も言わず、さっきまであった微笑みも消えて無表情で俺をじっと見ている。
その雰囲気に、却って自分の口角が笑みを形作る。
希望なんて持つものじゃないから。

「あの二人の間に俺が生まれなければ、あの二人はずっと幸せに暮らせたのかもしれない……俺が生まれた事自体がすでに悪行だったとしたら……俺、次は地獄行きなんですかね？　あー……魂末梢とかもアリかな？」

何があっても人生自己責任。俺はそう思ってる。
そりゃたまには他の何かのせいで、ってのもあるだろう。
事故でも病気でも天災でも理不尽な事ってあちこちに転がってるんだから。
だから、後悔の無い様に精一杯生きてきたつもりだった。

でも最初から、邪魔なモノとして扱われる為に生まれたんだとしたら？
誰かを、何かを不幸にするようなそんな存在なんて必要なのか？
もし俺がそうなのだとしたら。

俺は、もう俺なんてイラナイ。
それとも、まだまだ苦しまないと犯した罪とやらが消えないんだろうか。
何にしても多分俺が決められる事じゃない。
そんな都合のいい夢なんてないって、わかってるから。

「ねぇ、カミサマ。俺って、要るの？　要らないの？」

きちんと笑えてるかな、俺。

「まったくもう……君という存在はどうしてこう……」

カミサマはそう言い、盛大にため息をつき飽きれたような笑みを浮かべた。
はて、何かヘンな事を言ったかな？……と、つい首を傾げてしまう。

「必要だから顕現する。不必要なものなんて、そうそうあるもんじゃない。私たち神だって、そういう存在なんだしね。……あぁ丁度

いい、来た来た」

カミサマがひょいと右上に視線を向けたので、ついその先を追うとそこに光が現れた。
光はカミサマの右隣に降り立ち人の形になる。
夏の日差しの中で輝く大樹の葉のような深い緑の髪。けれど肌はなめらかな象牙色で空の様な青い瞳。
服は薄い緑色だった。

「待たせましたか？」

鈴のような澄んだ声に白い髪のカミサマが応じた。

「いや、丁度いい……視えてるよな？　アレ」

「……ああ、本当に。貴方の仰る通り凄い状態に……」

「うん。なので、頼めるか？」

「承知いたしました。時間はかかるかもしれませんが……」

「構わないよ。待つのは慣れている」

よくわからない会話が目の前で行われているが、［アレ］というのはどうも俺の事っぽい。

会話を終えたらしい白い髪のカミサマが再び俺を見る。
とっても優しい笑顔だった。

「君はね、君の希望でその人生を選び取ったんだよ。誰も、君のせいで不幸になんてなってない」

え？

「辛いとわかっている役割を、最期までこなして今、ここに居るんだよ？」

……そう、なの？　そういう役割だったの？
……
……

よかった……
そうか……誰も不幸になってないのか……うん、なら、いい……
この上ない安堵に心が軽くなった。
あれ？　なんでだろう……急に、ねむく……

「しばらく君のお仕事はお休みだよ。ゆっくりと癒しておいで……」

白い髪のカミサマの声が遠くなる。

「こちらにまた戻ってきた時、その時には君から預かっている全ての記憶を返すから。あ、私を忘れない様に今生の記憶だけはそのまま持って行ってね」

なんだかくすくすと笑っているような声音。
それって……どういう……？

「ここへ戻ってくるの、ずっと待っているから。いってらっしゃい」

俺の意識はそこで途切れた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

白い髪の神様は眠りに落ちた律己へ軽く両の手のひらを向ける。
それまで生前……一条律己の姿であった人の形が崩れ、林檎ほどの大きさの丸い光の塊となる。
それはふわりと浮き、白い髪の神様の胸の前で止まる。

「元の色が判らないほどに傷が深い……いつも無理ばかりするから……」

白い髪の神様は愛おしそうにその光の塊……律己の魂を撫でる。
ガラスのような表面には沢山の傷が刻まれていた。
浅い傷、長い傷、深い傷、抉れているような場所もある。
元々は透明で内部の光が外へと漏れ出る筈なのに、内部にある青色の光はうっすらと霞んでしか見えない。

「本当は私が癒してあげたいんだけど、元に戻ったらまたすぐに仕事しようとするだろうからね」

白い髪の神様は律己の魂を深緑の髪の神様へと渡す。
軽く会釈しながらそれを受け取った深緑の髪の神様はあらためて嘆息した。

「本当に凄い方ですね……ここまで傷がついているのに内部の輝きだけは濁りすらないなんて」

「他の誰もがやりたがらない生ばかりを選ぶからね……私の子の中

でも抜きん出てる。並ぶのが楽しみだよ」

「では、こちらの世界から戻ったあかつきには、候補ではなくなると？」

「うん、そのつもり。だから、よろしくね」

「承知しました。わたくしたちも十分に楽しませてもらいます」

「またね、リツキ」

もう一度だけ律己の魂にそっと触れ、白い髪の神様は深緑の髪の神様に視線を送る。

深緑の髪の神様は律己の魂と共に、来た時と同じように光となって消えていった。

1　話（後書き）

リハビリ作品です。

一人称って結構難しいんですねぇ……

2　話　　神様（前書き）

この作品には〔残酷描写〕〔１５歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現〕が含まれています。
１５歳未満の方はすぐに移動してください。

2　話　神様

律己を他世界の神へと預けた白い髪の神様は地上を見据える。
少しだけ先の未来を確認するために。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【大家ｓｉｄｅ】

「一条君、いるー？」

夕方、アパートの大家が律己の部屋のチャイムを鳴らす。
一人暮らしの青年のために週に一、二度、おかずのおすそ分けをしているのだ。
返事はないがたまにあることなので、大家はドアノブに手をかけた。

「まーた鍵閉めてない。全くもうこの子は……」

苦笑しながら扉を開け中へと入った。

流しの傍におかずを置き、再び声をかける。

「一条君、寝てるの？」

今週は全部夜間バイトだと聞いていたので、起きているだろう時間に来たつもりである。
いつもだったら布団も畳まれている筈なのに、奥を見るとまだ布団の中にいる様子だ。

「どうしたの？　具合が悪いの？　もしかして風邪でもひいたの？」

そう言いながら大家は近くへと歩み布団の中の律己を見る。
ただ寝てるようで熱があるようにも見えない。
バイト時間が変更になっていないのなら、もうそろそろ起きないとヤバイ時間だ。
大家はそっと布団の上からポンポンと叩く。

「一条君、もう夕方だよ。一条君てば」

叩いても動かないので、ゆらゆらと動かそうとして大家は違和感を感じた。
重い、というか硬いのだ。
眉を寄せながら大家は静かに律己の頬に手を当てる。

「！！」

ひんやりとした冷たさに大家は目を見開き、律己の体をがくがくと揺らす。

「一条君！　一条君っ！　律ちゃん！　律ちゃんっ！！」

硬い体は思うほどには揺れず、律己は呼びかけに応じる事もない。

「……りっ……」

大家は枕元にあった律己の携帯電話をとり救急車を呼ぶ。

救急車は数分で来た。
すでに死後硬直状態なので救急隊員からの連絡で警察まで来た。

「おととい会った時は元気だったのに……なんで……」

ぽろぽろと大家の目から涙が落ちる。

中学の時からずっと見てきた……孫みたいなものなんだ。
親から捨てられたも同然なのに、文句とか愚痴とか我儘とか全然言わないんだよ？
他人なのに、私の家の大掃除とか家具の移動とか進んで手伝ってくれるとかあるかい？
優しくていい子なんだよ。本当にいい子なんだ。
そんな風にハダカに剥いて写真なんか撮らないでおくれよ！　殺されたとかじゃないんだろう？
お願いだよ……やめておくれよ……

一通りの流れの後、律己の遺体は病院へと運ばれてゆく。
身内に連絡が取れるようであれば、と病院名を告げられ大家はひとり残された。

大家は自宅へと戻り過去の書類を探す。
母親の方はわからないが、父親の方は契約時に記されている電話がいくつかある。
自宅、会社、携帯。
自宅と会社はもう使われていなかった。
番号を変えていなかったらしい携帯だけは生きていた。

留守電だったので、こちらに電話してもらえるよう伝言を残した。
一時間後、大家の自宅の電話が鳴る。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【親side】

着信はマナーモード中の振動として男に伝えられる。
留守録に入っていた声と名を確認し、男は少し首を傾げた。
もう随分と以前の知人という感覚だったから。
緊急というわけでもないだろうからと、男は仕事を終えてから電話を掛けることにする。

まだあのアパートに住んでいるのか、と正直意外に思った。
成人してとっくにあの場所からは出ていると想像してたから。
しかし、今頃大家からの電話の内容とは何なのだろうか？
もしかしてこのご時世で家賃踏み倒して夜逃げでもしたか？
そんな事を思いながら男は大家へと電話を掛ける。

隣の市からの移動のため、男が病院へと着くのは一時間以上もかかっていた。
受付で一条律己の身内だと説明すると別室へと案内される。
その途中、男は突然呼び掛けられ驚愕した。
目の前に居る清掃業の服を着ている女は、十七年も前に別れた自分の妻だったから。
短い会話で男が事情を女へと説明する。
女は掃除用具をその場に置いて同行を望んだ。

霊安室に安置された律己の遺体の傍らで男女は呆然とする。
就寝中亡くなったのだろうという事、解剖の結果突然死であるだろうという事を伝えられた。

男は最後に会った律己の四年前の姿を思い浮かべる。
縁を切ると伝えた時、物静かに「そう、うん、わかった」と微笑んでいたその顔を。

女は家から出る前の律己の姿を思い浮かべる。
一緒に来る？　と聞いた自分に「ううん、いい。行かない」と左右に振られた頭、そして微笑み。

二十二歳にしてはかなり痩せぎすなその姿に、いい生活ではなかったのだろう事を感じ取る。
眠っているようにしか見えないその遺体に、男が呟く。

「何か言えよ……文句ひとつ言わねぇで、居なくなるなよ……」

八つ当たりで数えきれないくらい暴力をふるった。
それでもこの子は自分の傍から逃げようとはしなかった。
自分に迷惑かけないようになのか、それとも怖かったなのかは判らないが、一生懸命に頑張っていた姿を知っている。
自分には過分なほど出来た子だった。けれども、それが無性に腹立たしかった。
まるで、自分の駄目さを再認識させられているようで。
これ以上一緒にいたら、いつか殺してしまうかもしれない……そう思った。
だから別居する事にした。
恨んでくれていい。将来、殺しに来てくれてもいい。そう思っていた。

女はそっと律己の頭を撫でる。
自分の見知ってる姿は五歳児の律己のまま。
だから、この姿を決して忘れない様に見つめる。

「大きく……なったんだね……」

誰でもやっているからと言って育児を甘く見ていた。
他人(ひと)の手助けなんてなくても、それくらい出来ると考えていた。
仕事仕事で自分を見てくれない、助けてくれない夫に腹が立った。
八つ当たりで何度もこの子を叩いた。残酷な言葉もさんざん言った。
あの頃は自分もまだ子供だったんだと、今なら判る。
もしあの時この子を連れて出て行ってたとしたら、きっと何年か後には殺してしまったかもしれない。
行かない、と。そう答えが返ってきた時、ほっとしたのを覚えているから。
捨てた自分は、憎まれても恨まれても当然だと、そう思っていた。

「律ちゃん……ごめん……ごめんね……」

話し合い、男女二人は動く。
二人とも会社に身内の不幸での休暇を申請し、病院に紹介してもらって二人だけで葬儀を終えた。

二人は遺骨を持ってあのアパートへと帰ってきた。
連絡を受けていた大家が部屋の鍵を開け、中へと誘う。
葬儀屋の手配で置かれた簡素な台の上に遺骨を安置する。
大家もそっと手を合わせた。

初めて見た息子の部屋の様子に男女は驚きを隠せなかった。

「なんで……こんなに物がないの？」

フライパンと鍋がひとつ。包丁も一本だけ。
コップが三つとお皿が五枚、茶碗やどんぶりが四つ。
電子レンジと小さな冷蔵庫が一つ。
けれど、冷蔵庫の中には殆どものが入ってない。
こたつがひとつ。布団が一組。衣装ケースが一つ。パソコンが一台。
あとは本が数冊と、書類関係なのか紙類がまとめられたケースが一つ。
目につくものといえばそれくらいだった。
自分たちもそうであったが、普通、一人暮らしの若者の部屋は色々と物が置かれ賑やかなものだ。

「律ちゃんは心配性だったから」

「え？」

大家が語る。

「自分に何かあった時、沢山ものがあったら片づけるのが大変だろうからって。そう言ってた。両親は多分まだ生きてるだろうけど、自分が死んだとしても来ないかもしれないから、って」

大家は立ち上がり奥に置いてある紙ばかりのケースを持ってくる。

「もしそうなったら部屋の物全部売っていいからって。今まで世話になってる足しにもならないけど受け取ってほしいって。もちろん断ったけどさ……」

ケースを開け、下の方から古く薄いノートのようなものを大家は取り出した。

「これだけは絶対に親に渡さないといけないって、ずっと思ってた。今回連絡取れなくても、興信所使ってでも探して、送りつけるつもりだった」

すっ、と差し出されたそれは……

「おえかき、ちょう……？」

ぽそりと男が呟く。
大家はぐいっと男にそれを受け取らせる。

「律ちゃんの宝物だよ……開いてみな」

大家の言葉に表紙をめくる。

「！」

「……ッ！」

男女とも、目を見開いたままになる。
震える手で次々に他のページも見ていく。

「律ちゃん、たまにそれを見て嬉しそうにしてた。これ一つしか残ってない宝物なんだ、って」

大家の言葉と最後のページが重なり、男女の目から大粒の涙が零れ落ちる。

それはまだ、家族が共に暮らしていた頃の物。
幼い子供の落書き。
どれもが皆、笑顔、笑顔、笑顔。
つたない文字で書かれている「おとうさん」「おかあさん」「りつき」の文字。
過去の、幸せな頃の記録。
最後のページに大きく書かれていたのは「たいせつ」「だいすき」という文字。
男女は、その最後のページを開いたまま泣き続けた。
幼児の文字で書かれているその「たいせつ」と「だいすき」の上の方に、もうひとつ文字があった。
最近書かれたのか、きちんとした大人の字ではっきりとしているその文字は。
「今でも」と書かれていた。

その後。
色々な事があったが、結果の一つとして男女は再婚する。
実際、双方ともが新しく作った筈の家族とは短期間で係わりを終えていたのだ。
息子の墓を拵え、息子の居たあのアパートでもう一度やり直す。
それが二人の決めた未来だった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

白い髪の神は望んだ以上の結果に満足する。

もし、あの二人の間に生まれた子がリツキでなかったとしたら。

父親を捨てた母親についてゆき、数か月で殺害されてしまったろう。

母親についていてゆかなくても、父親が殺してしまっただろう。

リツキだったからこそ今生、あの二人は殺人を……罪を犯さずに済んだ。

もし、あのアパートにリツキが住まなかったら。

家具の移動を自分一人で行い、それに押しつぶされて大家は死んでいた筈だった。

今生、リツキと係った事で本来の運命が良い方向に転じた者は、実に二桁に上る。

白い髪の神様と天界の者達だけが、それを知っている。

「誰も、不幸になんてならなかったよ。リツキ、君のおかげでね」

見ていた地上の景色を消し、白い髪の神様は光の塊となって何処かへ消えていった。

2　話　　神様（後書き）

周りの人たちのお話。

次話は多分、三日以内くらいでいけるかと。

3　話（前書き）

この作品には〔残酷描写〕〔１５歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現〕が含まれています。
１５歳未満の方はすぐに移動してください。
また［性］に対する免疫がない方、あるいは［性］の苦手な方はご注意ください。

3話

律己です。

意識を取り戻したら姿形が生前の自分のそれと変わっていました。

黒髪茶目の黄色人種が、深緑の髪と青い瞳の白人肌とか……

あのぅ、それってカミサマの色と同じなんじゃあ……

「うん、そう」

希望とか選択とか拒否権とか……「ないから」

……ここでもココロ読まれてるし（涙）

まぁ、ともかく。

自分の元居た世界からこちらの世界へと自分を連れてきた深緑の髪のカミサマから色々と説明を受けました。

何でも、俺の魂が傷だらけなので、それを癒さないとならないそうで。
応援するから、自由に生きてね。と、あっさり言われた。

「完全に治ったら元の世界へ送り届けるからね」

「よく判らないけど。治るって、どのくらいかかるんでしょう？」

「さぁ……？　魂の癒え方って、魂それぞれだから。数年の魂もいるし、数百年とかって魂もあるし」

「さいですか」

「下準備は沢山してあげるから安心してて。そう簡単に死なせない様にしたし」

「は？」

「使える能力とかも、君が一番使いやすい種類にしてるし」

「へ？」

「まずはこの天界でしばらく暮らしてね。皆で愛でるからV」

「何それ……って、何でそこではぁと？」

何やら不穏な気配感じるんですけど、気のせいだといいなぁ……

まぁ、なんというか……
この世界［ウィス］の創世神である［ティ・リア］というのが、あの緑の髪のカミサマでした。

あれから。
創世神のすぐ下位にあたる、この世界の沢山のカミサマ達に引き合わされました。
普通考えたら人であった自分なんて、到底手の届かない方々ばっかりなんですよ、判ります？

「私の大切な御方からお預かりした稀有な魂です。いずれその御方の元へお返しするまでは、私の愛ぐし子として慈しみますので皆さんもそのおつもりで」

あのー、なんか他のカミサマ達の視線が痛いんですけどー。

「ご挨拶、しましょう？」

あーうー……カミサマ達って、この会話も聞こえてるとかじゃないんですかぁ？

「それは私だけの特権です。あと敬語禁止。貴方の持つ普通の言葉で、タメでもおっけぇです」

タメとかおっけぇ、て……前の世界の言葉なんだけど通じるの？

「多少は違いもありますが、この天界では全ての言葉が基本あなたの元居た世界と同じと思ってもらって結構です。地上世界については、あとで魂にあらゆる知識刷り込みますから問題なし」

チートだ。

しかも挨拶を待ってるのか、他のカミサマ達の視線が一層強く険しくなってる気がする。

無難に無難に……

「えーと。一条律己です。お世話になります」

ぺこりと軽く会釈をしてみる。
あれ？　何かカミサマ達の雰囲気が変わった……？
笑っているカミサマもいるし、きらきらと楽しそうにしているカミサマもいる。
振り返るとティ・リアもにっこりと他の神様に向かい笑みを浮かべている。

「理解していただけた様子ですね、では頼みますよ」

そう言うとティ・リアは俺に視線を向けた。

「私はちょっと用があるので離れますが、判らない事とか困ったことがあれば、どんな事でも他の方々に言うんですよ？　あと、本気で困ったら私の名を呼ぶ事」

「はあ」

ティ・リアは軽く頷き、その場から一瞬のうちにかき消えた。
残された律己の傍へ、一番前の方に居た四人の神様がやってくる。

「ようこそウィスへ、リツキ」

その後はもう、もみくちゃでした。
触られたり撫でられたり抱きしめられたりで最後は意識かっ跳びました、ええ。
次に意識取り戻したら数人のカミサマだけになってて「申し訳ない」と謝罪されましたが。
本気で困ったら、って。こういう事だったのね……

何でも、この世界では転生とか迷い人とか事故……俗に言う異世界トリップみたいのとかは、たまにあるらしいんだけど。
この世界を治めている創世神自身がこういった形で愛ぐし子をつくるのは初めてなんだそうで。
俺が挨拶する前、何か険しく感じたのも「創世神自らの愛ぐし子がどれほどのものなのか」見極める形でカミサマの皆さんはそれぞれの神力を自身に纏っていたそうな。

フツーの人間の魂だと身動き一つとれないか、神力の重圧に耐えられず意識飛ばしたりするんだって。
弱い魂だと、そのまま存在消し飛ぶとか……
あぶねーな、をい、って心の中でツッコミいれちゃったよ。

で、俺はというと特になーんにも感じなかったんだよね。
視線が刺さって居心地が悪いってくらいだったし。

という訳で、カミサマたちにちゃんと受け入れられました。
結果としていうと。
それからの十年間、思う存分皆さんに愛で倒されました。
色んな意味で凄い経験でしたよ、ええ。

あと。
この世界を知るという事で、脳裏というか魂にらしいけど、世界の基本的な知識（歴史読み書き言語）以外にも色々と色々と刻まれました。
便利なのは錬金術に近い魔術や神術が、わりと制限なしで使えるってもの。
生命を作り出したりは流石に出来ないけど、それ以外は理解分解再構築で使用できる。
基本、俺のイメージだけで魔方陣とかは自動生成されるというチートさ。
この地上世界で一生懸命勉強とか研究とかしている魔術師さんた

ちゴメンナサイって代物です。

地上世界では反則技になるものもあるので、実地訓練も散々させられました。
今は魂だけの存在だから力の元になる神力や魔力を楽に扱えるけど、肉体を持って地上で使うとなると、どうしてもその肉体っていう器がその力の元を受け止める容量が限られるんだそうで。

ええ、ええ。
肉体付いた状態でもかなり練習しましたよ。
何度か、ぽっくりぽっくり生命活動終えちゃって天界を騒がせましたけど。

死んでもすぐに生き返させられるとか、奇跡てんこ盛り。
それって反則なんじゃぁ……って聞いたら「リツキだけ例外」とか言われた。
何か俺、どんどん人外になってく気がするよ。

で。
現在、俺は地上世界に居ます。
十年天界で過ごして、ようやく地上で人として一人で生活してヨシ、と認可が下りました。
魂のままだと歳とる感覚とかないから、精神年齢死んだ時のままだけどね。

長かった……
この肉体を作ってもらえるまでが長い道のりだった。

男女どちらの肉体にするか、から始まって、身体つきや顔の造作に至るまで。
カミサマ達が揃いも揃って口をはさむ事はさむ事。

魂だけの間もだけど、肉体付けての練習時でも、男女両方の姿態は経験した。
骨格とか違うと随分動きにも差が出るのが新鮮だった。
あっちの方なんかも、女性の方が感度が良くて面白かった。

……実際、俺が男女どちらの姿でも、カミサマ達は愛する事に遠慮ないんだよね。
殆どは合意での事なんだけど、たまーに襲われて創世神呼び出す破目になったりもした。
幾ら目的が愛と神性の交感だとしても、無理やりはお断りです、はい。
そのカミサマは、創世神に説教くらった後で他のカミサマ達にも容赦なく凹られてました。

俺も、女性の身体もいいよなーとは少し考えたけど。
今の地上世界の状況じゃまだ、女性一人では生き辛いだろうから。
そういう理由で、身体の方は何とか男性にしてもらえた。

実はカミサマ達、結構多くが俺を女性の身体にしたがったんだよね。
理由聞いて即刻却下したけどさ。
「世界で一番見目麗しい少女を降臨させてみたい」とか、どんな理由だよそれ。
肉体は男って事に決まってからも「美の神の恩恵てんこ盛りで！」とか言ってくるし。

ヤメテー！
そんな人外な美形とか、なりたくもないから！
フツーがいいんだってフツーが。

結果。
それなりに整ってるけど、まぁ普通の顔に決まってホントに良かった。

自分ではあまりそう思ってないんだけど、俺って結構無謀らしいんだよね。
地上で人間として、やってみたい事はあったけど。
カミサマ達が俺が人として地上世界で生活するの心配して心配して心配して……
結局、全カミサマの加護つきになっちゃった。
だから、事故ならともかく人に殺されたりは絶対に出来ない。

いや、普通の人間の肉体だからきっちり死ぬよ？　不死とかじゃないもん。
問題は死に方なんだよね。

老衰とかでホントに人生全うした！　とかだったらいいんだろうけど。
もし、俺にとっての不本意な死だったりしたら。
もしくは、カミサマ達にとっての許せない死だったりしたら。

状況にもよるけど、多分、その場で生き返る……というか、蘇えさせられる。
いやあの方達の事だから蘇えさせるの前提で、まず魂ごと肉体掻っ攫って天界に戻りそうだな。
カミサマ降臨ってやつで。
その場合、俺が死んだあとの、人へ対するカミサマからの報復が怖い。
死なない様に頑張るから……そういう恐ろしい事しないでくださいね。ねっ？

それと全カミサマの加護つきって、前例がないんだって。
カミサマ達は気に入った人間に加護を与えるけど、普通人間一人に一柱。
多くても三柱くらいなんだと。
加護を受けた場合、身体のどこかにそのカミサマ固有の御印ってのが刻まれる。
御印は普通の人間には見えないけど、心の綺麗な人や子供なら見

えたりする。
大人になっても見えるのは神官や巫女という特殊な力を持ってる者たちで、見えない人達に御印を見せる事も出来るんだって。

自分に不思議現象があった場合、神殿とかで御印がないか調べてもらうってのが一般的で、豊穣のカミサマの加護とか商売のカミサマの加護とか、そういうの持ってる人はそれらに係わりのある職からは有り難がられる存在になる。

俺はそういうのに祭り上げられるのはご免だから、神官や巫女に御印を悟られない様に、沢山のカミサマ達の御印は魂に記してもらった。
それでも何かどうしても御印特有の波動みたいなものは漏れ出るんだそうな。

やりたい事はあったから、その知識や技術もきっちり身につけて、そのカミサマの御印を胸に刻んでもらったんだけど。
魂に刻んである他の御印の影響で、その表立っている御印が、かなり目立ち過ぎるんだそう。
だから、それを誤魔化す為に精霊王の御印を、元々の御印の上に重ねる形で胸に記してもらった。
なんで、そういう人たちが普通にそれを視たとしても、精霊王の御印持ちと考えるらしい。

生き物それぞれが持つ、生きている間の役割。
俺も、人間として地上世界で生きるなら、って、創世神から役割をお願いされた。
その役割に精霊王も係わってるから、実際丁度いいんだって。

俺としては、精霊王の御印だって凄いものだと思うんだけどね。
あらゆるものに宿る精霊たちは大まかに火、水、風、土の精霊長の指揮下にあって、それらすべてをまとめているのが光と闇をも扱う精霊王なんだけど。

この精霊王、ちょっとM入ってるみたいなんだよね。
カミサマ達に命じられて俺に御印を記す時「下僕と……いえ、奴隷と御思い下さい」ときた。
返事に困ってると「踏まれようとなじられようと、貴方様に使役されるは享楽にございます」だと。
……えーと。俺にジョオウサマになれと？
「ムリ。俺、基本S属性ないから！」って訴えたら。
「判りました……放置なんですね……甘受いたします」とか、うっとりしてるし……
も、いい。好きにして……

どうやら［創生神の愛ぐし子］［全部のカミサマの加護］ってい
うこの二つのせいで、精霊達にとっては俺って人間なのに、ほぼカ
ミサマ扱いになってるらしい。

俺、地上でひとり、のんびりだらけて生きたいと思っているんで
すが。
大丈夫なんでしょうか？

3　話（後書き）

新しい世界での、天界のリツキ。

愛されてるなー、うんうん。

4　話（前書き）

この作品には〔残酷描写〕〔１５歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現〕が含まれています。
１５歳未満の方はすぐに移動してください。

今回［流血表現］もあります。痛いのが苦手な方ご注意ください。

4話

リツキです。

地上へ降りて三年が経ちました。

地上世界における人間社会の中で、成人というのが大体十七歳だという事で、地上に降りた時の俺の年齢は、十七、八歳くらいにしてもらった。

なので、現在大体２１歳辺りになるはず。

他の人間とあまり付き合ってないし、あんまり鏡とか見ないからよく判らないんだけど、自分でたまーに見る限り、何かもう少し若く見えるけどね。

身長もう少し高くしてもらえばよかったかな？

創世神と同じというこの髪と目の色はこの世界じゃわりとあるらしくて、［天の大君の色］って呼ぶ。

何か一芸に秀でているっていう印みたいなものなんだって。

かえって黒髪黒目の方が少ないって知ってびっくりしたけど、世界が違うんだからそういうもんだよね。

実際、他のカミサマ達の色彩凄かったからなぁ……色の組み合わせが。

見てて目が痛いカミサマも居たけど、そのうち慣れた。

だって、地上にいる人間とか動物とかもカラフルなんだもん。見てて楽しい。

この地上世界の現在の雰囲気は地球でいうと中世に近い。
武器でいえば銃らしきものはなく、剣や槍、弓矢や鈍器とかが基本。
勿論、電気なんてない。

地球と違うといえば、例えば移動手段。
徒歩、馬、馬車、牛は基本だけど、それとは別に騎竜とか飛竜が居る。
どちらもトカゲみたいなひょろりと長い体躯で、飛竜には蝙蝠のような羽がついている。

動物は地球のと良く似てる。
犬や猫もいるし、鹿やウサギもいる。
たまーに猫の尻尾が二股だったり、犬の頭に角があったり、ウサギに羽が生えてるのが居たりするけど……ま、異世界だし？

あとは魔術や神術がある事。
でも、魔力や神力っていう力は、持ってる人と持ってない人がいる。

持ってる人も弱い力の持ち主から強い力の持ち主まで様々で、属性も色々とある。

大まかに分けると、医療とか癒しとか神様への祈りとかは神術系統。

それ以外は魔術系統にあたる。

魔力とか神力とか持ってない人は、術が仕込まれている術石というものを使用する。

だから、火を起こすのも夜間の町の明かりも魔術を使う事の方が一般的だ。

術が込められる媒体は色々とあって、術屋で普通に売られている。

もちろん媒体や術の種類によって価格は様々だけどね。

それと、地球には居ないけど、この世界には魔物とか魔獣とか神獣とかが存在する。

飼いならす事が出来る種類から手におえないものまで多種多様。

ある程度まで教えてもらったけど途中で投げた。多過ぎ。

神獣は神力を持っていて神術を使えるし、魔獣とかも魔力持って魔術っぽいものが使える。

魔物は魔術は使えないけど、特殊な毒とかもってるヤツが多い。

音波みたいなの出して相手の動きを麻痺させるヤツかも居る。

こわいねー。

人間の知識がどれくらいかとして挙げるなら、自分たちの住んでいる大地が球体であると認識されてない辺り。
夜空の星は天界からの覗き穴だそうだ。現在自分たちの居る大地は平らだと思われている。
実は球体なんだよとか教えたいけど、そういった研究をしてる人も居るらしいんで、自然の流れに任せてほしいってカミサマ達に言われた。
そりゃそうだよね。早すぎる知識は異端でしかないのは地球の歴史でもあったし。
その辺りはしっかりと傍観者になりましょう。

天から眺めるとよくわかるけど、この星は地球より少し小さい感じがした。
大陸は大きなものが二つ、あとは島々が色々とある。

一日は、ほぼ二十五時間。
ひと月が二十八日。七日の区切りで、白、銀、金、黒という呼び名がついてる。
一年が十五ヶ月。地域によって多少の違いはあるけど、春、雨、

夏、風、冬という感じ。
地球とよく似ているので嬉しい。

大陸の一つが［エルレ］、もうひとつが［フルス］という呼び名。
今、俺が居るのは［エルレ］の方。
［フルス］の方は［エルレ］よりも人間が少なく未開の場所が多いらしい。
二つの大陸の位置は丁度、星の表と裏みたいになっているので、まださほど交流がないんだって。

エルレ大陸には大きく四つの大国……［北のコルトラ国］［西のアルゼルク国］［南のザウガンド帝国］［東のラクス王国］がある。

最初は居場所を固定せずに旅して回るつもりだったんだけど。
諸事情でこの三年、エルレ大陸の東にある国、ラクス王国の北に隣接する大森林、通称［聖魔の寝床］で日常生活を送ってます。

この大森林はかなり大きくて、広さでいえばラクス王国国土の倍以上ある。
上空から見ると大森林全体の形はいびつな円形になってて、大まかに中央部からドーナツ状に三層に分かれている。
一番外側は普通の森林。

鹿とか熊とか狼とかいるけど、その辺りさえクリアすれば人も暮らせる。
実際、住んでる人も少なからず居る。
この部分の森の通称は［樹海］という。

この大森林［聖魔の寝床］はラクス王国だけでなく他の王国からも不可侵な場所として扱われている。
つまり、どこの国の領土でもないという事。
領民の義務とかないし、税金とかも納めなくていいから世捨て人には最適。
ただ、毎日命がけだけどね。

何故かというと、普通の森林部である樹海からさらに森の中心部に向かうと、そこは魔物や魔獣の生活圏になるから。
普通の森林と魔物の生息区域の間は、特にはっきりとした境界が無い。
まだ樹海だと思っていて魔物の生息区域に足を踏み入れてしまうことは、それこそ誰にでも当たり前に起こりうる現状。
山や谷のある場所もあるし、人間には毒となる瘴気が蔓延している場所もある。
きちんとした準備もなしにそういった場所へ辿り着いてしまえば、それこそ待ち受けるものは死だけだ。
この辺りの森の通称はそのまま［魔の森］という。

大森林の外側には一応街道が設けられているんだけど、そこを通らずに近道しようとして外円の森林に入って、間違ってこの魔の森に近づいていてお亡くなりになる方も多数。
樹海にも盗賊とかいたりするしね。

そういう危険な場所なんだけど、薬の材料や魔術に使用したり武器に加工できる素材というものは実のところ、この辺りに多い。
採りやすい鉱石や薬草類もあるけど品質の良いものは危険な場所にあるし、高価で取引される魔物や魔獣の身体の一部とかは倒さないと手に入らない。
過去、この森でお亡くなりになった方々の遺品ともいえる宝石貴金属を収集する仕事なんかもあったりする。
なので、こういった危険区域でありながらも、冒険者は結構いたりする。

ただ、この魔の森からさらに森の中央部へと向かえる人間は少ない。
湖や草原すらもある、この大森林の中央部は聖なる領域。
神獣たちの住む場所なので［光の森］がここの通称。

ここは、最低でも上位精霊の加護の無い人間は足を踏み入れる事すら不可能。
結界で守られているから中央部の本当の姿を外部から見る事も不

可能で、一見ただの森にしか見えない。
飛龍がこの上空を飛ぶのも無理。
というか、まず怯えて近づけない。
気を付けないと、その手前の魔の森から空飛べる魔獣が出てきて襲われるしね。

どの国からも不可侵だというのは、過去この大森林を領土として手に入れようとして侵略した国が、ひとつ残らず神の逆鱗に触れて退却を余儀なくされているから。
カミサマ達から言わせると、生態系の保護なんだそうだけど。
神獣、貴重だしね。
何度やっても攻略が無理なので、どの国も諦めたのが現在まで続いてる。

で。
俺は現在その［聖魔の寝床］の中央部［光の森］で基本、生活してます。

最初の頃は食べ物とかを精霊に持ってきてもらっていたけど、最近は樹海へ行って自分で狩りをして獲る事もある。

狩りの仕方とか、さばき方とか、調理の仕方とかも実地訓練に含まれていたので現在では問題なくこなせている。
魔の森にある色々な材料を使って薬を作るのが結構楽しい。
それを近くの町に卸したり、樹海で生活している人たちに売ったり、食糧とかと交換したりしているのが日常。

俺が、やりたかった事。
それは薬を作る事。

生前、病気は風邪位だけど、怪我は沢山した。
程度にもよるけど、酷い怪我は自分の力だけで治すのはとても時間がかかる事を知ってる。
誰だって普通、痛いより痛くない方がいいよね。

すぐに治る薬があるといいのに……
それは小さい頃から思っていた気持ちだから。

この世界には神術がある。術式で怪我や病を治すこともできる。
でも、無から有を作り出せるわけじゃない。
何かを行うには、必ず対価が必要になる。

例えば、傷を癒すのなら、癒すための材料を身体の他の余剰部分

から取ってきて、それが分解されて再構成されて新しい皮膚とか筋とかになる、っていう感じで。
だから余剰な部分が足りない時なんかは、そういう術式は使用できない。
出来るのは薬で、少しでもその足りない部分を補う事。

勿論、薬だけで状態が改善する傷や病も沢山あるので、一般には術式での治癒より薬の方が流通している。

問題なのは、それらの価格。
神術にせよ薬にせよ、無料ってわけじゃないから。
新米の巫女や神官が訓練がてらに行う慈善治療を除けば、寄進なしの治療は有り得ない。

効き目の在るモノはどちらにしても高い。
安価で、効き目のある薬を作る。
薬師。
それが俺がこの地上世界でやりたかった事。

地上世界で俺がこなす元々の役割は違うんだけど、それとは別にしてみたかった事だから。
勿論、こなさないとならない役割の方が大きいのは確か。
だから、役割が本業だっていうなら、薬師は副業という位置づけになる。
本業に支障が出るなら、副業は規模を小さくするか、休むか止めるか、ってなる。
それも覚悟の上で、薬師を始めた。

俺の作る薬で、知らない誰かの顔に笑顔が戻るかもしれない。
もしそうだったら嬉しい。
そんな、ただの自己満足からなんだけどね。

この［聖魔の寝床］は薬の材料の宝庫だから。
取りに行ったり加工したりっていう手間はあるけど、楽しいし。
だから、儲けとかあんまり考えてないんだけど。
価格を変に下げ過ぎると他の薬師さんから苦情が入るだろうから、ぎりぎりまで下げてる。
薄利多売ができれば苦労しないんだけど、ひとりでそれやるのはちょっと無理。
ま、ゆっくり地道にがんばりましょう。

あ、魔の森にしても、カミサマ達の加護のおかげで野獣とかの脅威は特にないです。
頭のいい種類の魔獣なんかは、こっちを見てるだけで絶対に襲ってこない。
手を出したら痛い目に合うの判ってるらしい。

たまに襲ってくるおバカなのもいるけど、一応魔術で防御壁を纏うようにしてるから安全。
電撃付きで弾かれていくから。

かなり奥地辺りでもこれまで数回、人間の姿見かけたからね。
怪しい奴とか変な奴って思われても困るから、魔術使って身を守ってるって風にしておかないと。

でも、時間がないときは転送陣作って光の森から魔の森の端まで一気に移動する。
誰もいない場所狙って術を行うから他人に見られたことは一回もない。
今回も無事に樹海近くの魔の森へと到達しました。

本日の目的はいつもの樹海の中での物々交換ではなく、薬の材料集めしている時についでに見つかる宝石や装飾品が結構たまってきたので、その一部を買い取ってもらおうかと、少し足を延ばして街

道沿いの町まで行く予定。
肉はまだストックあったし、珍しい果物とか服地とかあったら買って帰りたいな。

光の森に居る時は生成りのTシャツと薄手の生地のズボン、足元も裸足か足首までのサンダルで過ごしている。
大森林の他の場所はともかく、光の森だけは常に常春気温なので身軽だ。
魔の森なんて極寒から酷暑な場所まで様々なんだよ。
だから、光の森を出て他の場所へ行くときは狩人に近い服装で行く。
今回もそういった服装で出てきた。

森は結構虫がいるから長袖長ズボンは鉄則。
両の手首には籠手代わりの幅広の金属の腕輪。
これ、枝なんかをはらう時とか怪我しなくていいから便利。

あと、右手の中指と左手の人差し指に自分で錬成した指輪。
この世界じゃ宝飾品は金銭代わりにも使えるし、それに術式とかも組み込んだりできるからね。一種の保険みたいなもの。
ちなみに大抵いつもは［傷の賦活・再生］と［毒消し］を指輪に組み込んでる。
毒なんかで痺れると口頭で呪文なんて言えないからね、場所指定

して力を通すだけで稼働する仕組みにしてる。

狩りの予定はないから弓矢は持たず腰に短刀だけ着けた。
足元は靴下代わりの布を巻き、皮のブーツっぽい靴を革紐で固定してある。
皮と布で作った袋に術石を三つくくりつけ、中に売買用の薬や素材、宝石とかお金なんかを入れて肩から下げ、少し厚手の茶色いマントを羽織れば立派な旅行者スタイルである。

途中見つけた薬草なんかをちまちま採取しながら、もうすぐ魔の森を抜けるという頃、わりと近くで悲鳴が聞こえた。
森では全て自己責任だから別に助ける義理とかはないんだけど、目の前で死なれるとやっぱ寝覚め悪いからね。助けられそうなのは、たまに助ける。
一応どんな様子なのか窺ってみると……をい。何でこんなのここに居るんだよ。

目の前には二十センチ位の大きさの蜂に似た魔物、ザマツがいた。

羽で空を飛び、女王を中心に群れで生活している。基本はスズメバチの大型と思っていい。
ザマツの巣に近づいてしまったり、たまたまザマツに遭遇した生物が、飛んでくるそれを切り落としたり潰したりしてその体液を一滴でもその身に浴びてしまっていたら、それらは全て敵とみなされ攻撃を受ける。
牙も頑丈だが一番の武器は尻から出ている剣のような針。
毒があり、刺されると身体が麻痺してしまう。
ただ、ザマツの主食はあくまで小動物や虫で人間が食われる事はない。
問題はその麻痺した状態で放置された後、ザマツの攻撃音に誘われ大物が出てくる場合が多いって事。

ザマツって普通、もっと奥地に居るんだけど……
考えるのとりあえず後回し、っと。

襲われている男の近くまで走りながら叫ぶ。

「マントを脱いで！　こっちに投げて！　早く！」

突然の俺の声に驚いては居たが、その男はすぐに自分のマントを外しこちらへと投げてきた。
地面に落ちたそのマントにザマツが気を取られた隙に、俺は自分

のマントをその男に投げる。

「それ被って蹲ってて！」

言い捨て、俺は落ちている白いマントを身に着けた。
白い色はザマツを惹きつける色。
狩人なんかはそれを知っているから、絶対に森で白い服は身に着けない。

攻撃する相手が変わった事をザマツが判っているかどうかはさておき、白い色を纏う自分の方だけにじわじわと寄ってくる。
どのくらい前から襲われていたのかは知らないけど、近くにザマツの死骸は落ちてない。
まだ体液が散ってないなら好都合だった。
ズボンのポケットから小指の半分ほどの笛を一本取りだして口にする。

ピィィィィィィィィィィィィィ！

この笛は大抵の虫追いに使われるもので以前行った町で購入した品、魔物用にちょっとだけ改良してある。
音に反応してくれたらしいザマツが森の奥へと飛び去っていく。
全滅させるのは簡単だけど、殺さずに済むならそれが一番。
ザマツの羽音が完全に消えたのを確認して、俺は助けた男の所へと近づいた。

「もう大丈夫。追っ払ったから起きていいよ？」

「……」

返事がない。動かない。

あー……うん。ここで放置はやばいんだけど、アレの訪問に間に合うかなー。

でも放置してて呼吸止まってたりしたらイヤだし。

麻痺毒はやっかいだ。

俺は自分の荷物から水薬と塗り薬を一つずつ取り出す。

「はい、勝手に脱がすよ」

頭だけとりあえずマントを外し顔を見る。

ぱくぱくと震えている唇に水薬をあてがう。

「麻痺毒の毒消し。ゆっくりでいいから飲み込んで」

数秒後、喉仏が動いた。二度、三度……四度目にむせた。

ゆっくりってのも、難しかったかな？

空になった水薬の器を唇から外して地面に置く。

「喋れる？　手とか動く？　何回刺された？」

「……に、かい」

「二回ね。場所は？」

ゆっくりと右手の指が左足のすねと左肩を指す。
本当は服脱いでやるのが一番だけど、急いでるから服の上からそのまま治療薬を塗りこむ。
ごめんよー。服代とか弁償は勘弁してね。

「すぐに動けるようになるけど、少しだけじっとしてて。喋らないでね」

頷く男にもう一度自分のマントを被せ、その場からザマツが去った方向へ数メートル離れる。
借り物の白いマントはつけたままだったけど仕方がない。
知っている気配が、じわじわ近づいてきてるから。
男に背を向け、動かずに待つこと数分。
感じた大きな気配に、用意していた術石を放り投げて展開した。

ドォォォン！！！！……バチバチバチバチ……

俺の横をノロノロと、でかくて黒っぽい塊が移動してばたりと崩れ落ちる。
見かけは人間より一回り大きいトカゲにみえる。
ザマツの羽音やその攻撃音を案内に麻痺させられた生き物を捕食する魔獣、ドラッザだ。
顎が蛇のように外れるので結構大きな生き物でもぱっくりと飲み込める。
動けない人間なんて一発で終わりだよ、怖い怖い。

どうやら、さっきのザマツの攻撃音を感知したのはこの一頭だけだったらしく、暫く待ったけど他に魔獣の気配はなかった。よかったよかった。

ざわざわと森が騒がしい。
近くで人の気配が沢山しているのが分かる。

手触りでこのマントがいい生地なのは判ってた。縫製もしっかりしている。
多分、目の前に居る男はお貴族様の類なんだろう。
樹海に狩りかなんかに来てて、何かのはずみで御付きの人達とはぐれて迷ったってあたりかな？
さっきの術式の音とかで場所は大体判るだろうから、そろそろここに着くよね。

「もう、大丈夫だから。動いてもいいよ？」

男の方に歩き始めたその時。
殺気と熱を、同時に感じた。
背中から腹へと抜ける、強い痛み。
下へ視線を向けると槍の刃先が見え、消える。

「……ッ！」

再度来る痛み。槍が抜かれ間もなく、また貫かれた。
悲鳴すら上げられない。
生暖かいモノが自分からほとばしっている。
何度か経験したからわかる。これはヤバイ。動脈イっちゃってる。

足から力が抜ける。痺れてる……って毒つきかよ、この槍。
地面にうつ伏せに倒れた勢いで嘔吐する。

何で？　とか、誰が？　とか、そういう事すら考えられない。
痛くて熱くて苦しい。

鼓動と耳鳴りが重なって煩い中、人の気配が増えた。
叫び声とかが聞こえて騒がしい。
そう思ってると、無理やり俺の身体は仰向けにされた。

暗い……目がよく見えない。
駄目だ……傷、早く治さないと……
傷口に右手を当て、心の中で指輪の術式を［展開］させる。

右手の指輪に施していたのは傷とかの賦活。稼働したのは何とか感じた。
次は左手……動けって……
動作がのろい。
毒が身体中に回ってきたらしく、息が苦しい。

くそっ、血と一緒に流れない種類の毒かよ……
左手を必死で動かし毒消しの術式が施してある指輪の術式を［展開］させる。
が、上手くいかない。稼働はしてるみたいだけど効果が薄い。

血が流れ過ぎてる……ヤバイヤバイヤバイ……
死ねない……死んじゃいけない……頼むから間に合って……
術式の波動を感じながら、俺はそのまま意識を失った。

4　話（後書き）

地上世界でのリツキ、開始。

5　話　　エルケ皇太子（前編）（前書き）

この作品には〔残酷描写〕〔15歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現〕が含まれています。
15歳未満の方はすぐに移動してください。

〔流血表現〕あります。痛いのが苦手な方ご注意ください。

5話　エルケ皇太子（前編）

その日。
ラクス王国の皇太子である私、エルケ・フィリリァド・セル・ラクスは、かねてより予定していた視察を兼ねての狩りに、樹海を訪れていた。

いつものように護衛の小隊を連れての行幸。
狩りをしつつ、途中で休息を取る。
これも、いつもの事だった。

私が狩りを許されているのは樹海でも比較的安全とされるその真ん中位までなので、護衛もさほど気負ってはいない。
それは、私自身もそうだった。
いつもの行動、想定内の結果。それを当たり前の日常だと信じていたから。
狩りの成果も良く、この休息後は帰城するだけという事で気を緩めていたこともあった。

ほんの少しの気の緩み。
護衛から数メートル離れた瞬間を狙って、私の足元に転送陣が発動された。
偶然や自然には有り得る筈のない現象。
人間（ひと）が、故意に引き起こさねば有る筈の無い現象。

「な……っ！」

瞬間、私の身体は別の場所へと転移されていた。

「！！」

出口として設けられていた場には、誰かがすでに誘き寄せていたのであろう魔物、ザマツが群れていた。

木々の生い茂る樹海の奥地。

ザマツが居るからには樹海と魔の森の境界部分か、それともさらに奥なのか。

そういった思考よりも早く、私にザマツが襲いかかってきた。

切ってしまえばさらに増えるだろう魔物を腕やマントで追い払おうともがくが、何分相手の数が多い。

隙を突かれて二度、刺された。

これ以上刺されてしまえば身動きが完全に取れなくなる。

私は必死でこの場の攻略を考えていた。

と、その時。

「マントを脱いで！　こっちに投げて！　早く！」

足音と共に、私に声がかけられた。
驚きはしたが、見ればどうやら狩人の様子。
経験が豊富なだろうその動きに、言われた通りに着けていた白のマントをその男に投げた。
マントにつられてなのか、私の周りからザマツが離れてゆく。

「それ被って蹲ってて！」

狩人が自分のマントを外して投げよこす。
震え始めた手でマントを掴み、言われた通りに蹲る。
そして狩人の様子をマントの陰から窺う。

辺りに視線を配りながら狩人は私のマントを羽織り、ザマツと距離を置きながらズボンのポケットから何かを取り出し口にした。

ピィィィィィィィィィィィィ！

甲高い笛の音の後、ザマツが森へと去ってゆくのが見えた。

ほっと一息ついていると、私の元へ狩人が戻ってくる。

「もう大丈夫。追っ払ったから起きていいよ？」

「……」

唇が震え、返事ができなかった。
少しだけ困ったような顔をして、狩人は自分の持つ荷物から何かを取り出した。
形の違う茶色の瓶がふたつ……薬か？

「はい、勝手に脱がすよ」

若者はマントを被っている私の頭の部分だけを外し、手にしていた薬の瓶を私の口元へあてがう。

「麻痺毒の毒消し。ゆっくりでいいから飲み込んで」

状況的に助けて貰った様には感じるが、この狩人に見える若者はここに私を転移した者の仲間という事もあり得る。
もしかすると毒消しではなく、本当の毒かもしれない。
それを思うと飲むのを躊躇してしまう。
目の前には困ったような優しい笑顔がある。

その笑顔を信じれるか否か。

もし、本当に毒なら。

私が口を付けるのを待たずに、無理やり飲ませているのではなかろうか？

迷ったが、これも運だと覚悟して口をつけ飲み込む。

だが上手く飲み下せずに最後はむせてしまった、みっともない。

若者は空になった薬の瓶を唇から外して地面に置いた。

「喋れる？　手とか動く？　何回刺された？」

樹海の中で目撃者もいない今の状態。

毒薬で殺すとすれば即効性のものだろうと覚悟をした上の事だったが、痛みや苦しさなどは一向に訪れない。

飲み下したものは、どうやら本当に毒ではなかったらしい。

逆に喉の痺れが次第に取れ、呼吸が楽になってきている。

私は問いに返答する為、何とか出せるようになった声を絞り出す。

「……に、かい」

「二回ね。場所は？」

麻痺が取れかけている右手で、ゆっくりと左足のすねと左肩を指した。
直接刺された場所にはまだ毒が残っているのか、あまり良く動かせない。

若者はもう一つの瓶から指で薬をたっぷりと取り、私の服の上から塗りこんでゆく。
じんわりと毒による腫れが引いていくのが感じられた。

「すぐに動けるようになるだろうけど、少しだけじっとしてて。喋らないでね」

意味が分からなかったが軽く頷いた。
すると若者はもう一度私に外していた茶のマントを被せ、その場からザマツが去った方向へ数メートル離れてゆく。
私が渡した白いマントはつけたままだった。
若者は私に背を向け、動かずに数分が過ぎる。
森の奥から大きな気配を感じた瞬間、目の前で突然術式が展開された。

ドォォォン！！！！！……バチバチバチバチ……

大きな音と焦げた臭いがする。
若者の横をノロノロと、でかくて黒っぽい塊が移動してばたりと崩れ落ちた。

おそらくは若者の袋に下げてあった術石での攻撃だろう。
崩れ落ちた塊は、ザマツの羽音やその攻撃音を案内に麻痺させられた生き物を捕食する魔獣、ドラッザだった。

もし身体が麻痺した、あのままの状態で一人だったら、到底助からなかった。
動けない人間など餌以外の何物でもないという現実に恐怖する。

若者はしばらく辺りの気配を窺っていた様子だったが、笑顔で振り返った。

「もう、大丈夫だから。動いてもいいよ？」

遠くから人の声などが風に乗って聞こえてくる。
おそらく私を探していた護衛の者たちだろう、と安堵した。
その時。
私の方へと歩み出した若者の動きが止まる。
目を見開き、ゆっくりと下を見つめている。
私も視線をそちらへと向けた。

「！！」

若者の腹部から刃物の切っ先が見える。あの長さと形状は槍だ。

若者の背後に人影が見える。
だが、間違っても私の部下ではありえない。見覚えすらない。

槍の穂先が一度消え、もう一度若者の腹部に生え、消える。
真っ赤な血が、開いた穴から噴き出してゆく。
若者はそのまま足を折り前倒しに倒れ伏した。
地面と白いマントが鮮血に染まってゆく。

槍を持った男と私の目が合った。
倒れている若者と私とを瞬間見比べ舌打ちし、こちらへとゆっくり向かってくる。
痺れは取れているが、そんなに早くは動けない。
この場で迎え撃つしかない……と、私は腰にある剣の柄を握りしめた。
と。
その時、あちこちから護衛の者達がこの場へと到着した。
状況を瞬時に察したのか、槍を持っていた男はすぐさま彼らに捕縛される。

「ご無事ですか殿下！」

「お怪我は！？」

部下の言葉に返答する時間も惜しかった。
痺れはもう殆どない。
立ち上がり、よろけながらも狩人の元へと急ぐ。

部下たちは怪訝そうな顔で倒れている若者を見ていた。
無理もない、見知らぬ者が私のマントを着けているのだから。
しかも私のマントを引き剥がす様にして抜いていた。
怪我人に何という事を！

「……ぅ……」

マントを抜かれた勢いで、仰向けになった若者の状態は酷いものだった。
内臓の損傷で嘔吐物にも鮮血が混ざっている。
目がうっすらと開かれたが、どうも焦点は合っていない様子だ。

「おい！　大丈夫か！？　気をしっかり持て！」

地に膝をつき呼びかけてみるが、聞こえていないのか何も反応がない。
傷が痛むのか、それとも傷口を押さえようとしているのだろうか、右手が動き傷口の上に乗せられる。
その瞬間、ガラスの割れるような音がして魔方陣が腹部に展開した。
流れていた血が止まり、ゆっくりと傷口が塞がってゆく。
見れば手の指輪の石が割れている。術式の一つだと理解した。
指輪に仕込まれていたのだろう治癒の術式には多少驚いたが、まだ危機は脱してはいない。

傷の治りが遅い。
ひくひくと痙攣しているその様子で、槍に毒が塗られていた可能性に思い至った。
左手がゆるゆると動き、腹部に触れないまま魔方陣が展開されてゆく……が、あまりにも小さい。
術に力が完全に乗っていない様子だ。
色彩から、以前見た事のある解毒用の術式だと分かった。

「しっかりしろ、死ぬな！」

少しだけ、二度目の魔方陣が大きくなり……左手がだらりと力を失う。
瞳はもう閉じられ、浅い呼吸だけが苦しそうに続いている。
他の術式が展開されている今、その術式の正確な中身が判らない以上、これ以上の手出しができない。
だが、この状態でこのまま、この場に置いていては死に向わせるだけだろう。
我が身を助けてくれた行為に対し、それはあまりにも酷というもの。

勿論まだ、この若者が私の命を狙った者の仲間ではないという確実な証拠はない。
この若者が刺された事すらも、情に訴える罠なのかもしれない。
けれど。もしそうなのなら、ここまで重い傷を負わすだろうか？

手練れた者でもマント越しに背中から槍で心臓を突くのは位置の特定が難しい。
勿論首も、マントで守られているから難しい。
狙われた場所は柔らかな腹部。
放置しても出血で死ぬように、刃を引き抜く時抉られて引かれたのを見ている。
あの時の、何が起こったか判らないというこの若者の顔を見ている。
何より。
あの槍を持った者が、私とこの若者を見比べた時の舌打ちと表情が私の脳裏に残っている。
間違えたか……という、舌打ちの後で動かされていた唇の動き。

何を、信じればいい？
ぐるぐると回る思考の中、最後に浮かんだのはこの若者の笑顔。

この怪我では治療しても暫く身動きは取れないだろう。
もし共犯者だとしても、この者を生かせばさらに口を割らせる機会が取れる……そう考えを決めた。
そして、もし本当に、この件とは無関係な者なのだとしたら。
その時は誠心誠意謝罪と礼をせねばなるまい。

私は部下へと叫ぶ。

「このまま保持して城へと移送する！　術師、出来るな！？」

傍らにいた術師が頭を下げる。

「保持と移送は可能です。が、この者の生命の保障はいたしかねます」

「今ならまだ間に合う。城の御殿医ならば……！　死なせたくない！」

「承知仕りました」

緊急時を考え、こういった行幸には魔術を使える人間を十人ばかり同行させている。

そのうちの三人が若者の身体の保持を行い、残りの七人が急ぎ移送の転移陣を展開させる。

残す隊員にもそれぞれ必要な指示をし、私は数名の護衛と狩人を連れそのまま転移陣で城へと移動した。

私の突然の帰城に、城内が大騒ぎとなった。

転移陣近くの一室をそのまま治療室と決め、医師や神官を呼びに走らせる。

使用した部屋は侍女や侍従用の空き部屋なので簡素だが、清潔できちんとした寝台もある。
すぐに寝台の上に若者を寝かせ、靴を脱がす。
着ている服は上下共に血で染め上げられている。
脱がせてやりたいが、まずは治療が先だ。
服をたくし上げ、傷がある腹部を晒す。
見る限り、表だった傷口は殆ど塞がっているかに感じた。
ただ内臓にも損傷があるのか、まだ魔方陣が輝き稼働している。
解毒の方も、小さいままの状態で稼働している。

時をおかずに医師達と神官達が部屋へと来る。
状況を説明すると、医師が二手に分かれた。
私が現地で怪我をしていたからなのだが、王族の御殿医長が私を診断して唸る。

「何かあるのか？」

「いえ……処置と経過があまりにも良好で、感動しているだけにございます」

「……それを行ってくれたのはこの者だ。助けてやってくれ、頼む」

「手を尽くしましょう」

御殿医長は若者の身体状況を観察しつつ、部下の報告を受ける。
若者を貫いた槍は持ち帰っている。
付着している毒の種類さえ特定できれば、治療の方法も採択できるだろう。
そう思っていた。
が、報告を受けた御殿医長の表情がやけに硬い。真剣に考えている。

「どうなのだ？」

訊ねた私に、御殿医長は重く応える。

「あと数時間が峠だと。そう申し上げるしかございません」

「何故！？　傷は殆ど塞がっているだろう？　解毒の魔方陣も、小さいがまだ稼働しているではないか」

「傷の方は問題ございません。間もなく完全に塞がるでしょう。ただ、使われた毒の種類が悪うございます」

「毒はあの術式で解毒できるのであろう？」

「はい。ですが、解毒できるのはあくまで毒性です。また、この術式が終了するまでは他の強い術式は同時展開できませんし、毒によ

って引き起こされる障害までは完全には治癒できませぬ」

御殿医長は若者を横目で見つつ、言葉を続ける。

「この毒は心臓そのものの機能を半減させます。平静の状態であれば……血の巡りさえ十分にあれば、まだ神官殿の治癒魔術等で補正が可能ですが、この方の現状は平静とは程遠い。出血が多すぎたのか、あまりにも脈が早い……極めて危険な状態であると思われます」

体熱が上がり始めたと、御殿医長へ報告が入る。

「精一杯処置はいたしますが、後はこの方の体力と気力、それだけです」

頭を垂れ、御殿医長は患者である若者の傍へと戻る。

治癒術等の使用できない現況で在る為、神官は一度神殿へと戻っていった。

変化の少ないまま、時間だけが刻々と過ぎてゆく。

私には何も出来ない。
出来るとすれば傍に居てやることくらいだ。
邪魔にならないよう傍らへ立ち、若者を見つめる。

額や脇に熱冷ましの呪を施された布が置かれている。
先程は熱でうなされているのか、少しだけ開かれている瞳は潤み、
細い涙が零れ落ちていた。
口元が言葉を紡ぐように動く。

おとうさん。
おかあさん。

そう、読み取れた。

私よりも若く見える。十五、六だろうか。
まっすぐな癖のない髪。
長さは私と同じく背の中ほどまであるが、私の髪は波打っている。

顔立ちは殆ど似ていない。
けれど。
私と同じ深緑の髪と青い瞳。
そして、あの時纏っていたのは私の白いマント。

もし本当にあの刺客と無関係なのだとしたら。
これらが重ならなかったとしたら、彼はこの様な目には遭わずに済んだかもしれない。
刺客であろうあの者は、私とこの若者を見誤ったのだろう。
それを考えると辛い。

少しして医師たちがざわざわと騒ぎ出す。
そちらへと目をやると、護衛が若者の持ち物を見聞している場面だった。

個人の持ち物を全てその場へと晒し、見聞する。
普通ならば本人の許可なしに行われることなどない。
けれど意識の無いこの者が誰なのか、それすら今の状態では判らないのだ。
名すら知らない、この者の身分、立場を確認するためには仕方のない作業である。
そこでの騒ぎとすれば、何か判ることが判明したのだという事。

「何かあったのか？」

私の問いに、護衛の者と御殿医長とが傍へと来る。

「持ち物を全て調べましたが、名はおろか、鑑札や身分の証となるものは何も身に着けておりません」

怪しい者だという意を込め、護衛はそう告げた。

だが御殿医長は別の意見を述べる。

「この者はもしかすると……薬師ではないかと思われます」

「薬師？　狩人ではなく？」

「はい。持ち物に沢山の薬剤がある事と、まだ採取して真新しい薬草類がある事。滅多に手に入らない魔獣の角の所持などありますが、決定的なのがこの薬剤の瓶でございます」

私の目の前に薬瓶を差し出し見せる。

中身の良く見えない茶色の薬瓶。私も飲まされた水薬の瓶だ。

「この独特の形状の薬瓶は、中の薬剤と共に数年前からこの近郊に出回っております。質も良く効き目も高い。独自な流通なのか王都

から離れた町でしか販売されてはいませぬが、あまりの効果の良さにこの王宮でも仕入れ、使用している薬剤にございます」

ちら、と横たわる若者を見る。

傷が完全に癒えたのか、賦活の魔方陣が消えてゆくのが見えた。

解毒の方はまだ稼働したままだ。

「業者は［天の大君の色を持つ者がいつも売りに来る］と言っておりました。その人物は［自分が材料を集めて調剤している］とは言うが［名乗らない］「居場所を告げない」のだそうで。私ども医療の世界でも謎の人物にございます。此度の彼の者もただの品物の配達人かとも考えましたが、殿下への傷の手当や対応、その結果を統合しますれば、この薬剤を作成している本人と考えるが妥当かと、そう存じます。事情は分かりませんが、恐らく樹海に居住している者なのでしょうな」

説明を終えた御殿医長と私の耳に悲鳴が聞こえた。

声の主を視線で探せば、医師見習いの一人が手を押さえている。

「何事か？」

現場へと足を向けた御殿医長の言葉に言いよどむ見習い。

ざっと状況を見る御殿医長。

「足元に落ちているのは、怪我人の持ち物にあった素材の一つだと見受けるが。何か言い分は？」

「……申し訳、ございません。この種類の素材を見るのは初めてなので、後でじっくりと観察したいと、そう思いまして」

「無断で持ち出そうとした、という事か？」

「……はい。ですが、いきなり手に熱が走り、取り落としてしまった次第です」

「処罰は後で考える。手は大事ないか？」

「は。軽い火傷様ですので」

「治癒術式の使用を認める。自身で癒せ」

「はい……」

不思議な現象に首を傾げつつも、御殿医長は落ちている素材を大切に取り上げ、護衛の一人に残りの薬剤と共に袋の中へと戻すよう指示をする。

と、今度は寝台の方から小さな悲鳴が上がる。

何事かと振り向いた御殿医長の目が驚愕に開かれる。

意識が無いままの若者の唇が動き、水を含んでいる。

ただ、その水は吸い飲みなどの道具はおろか誰の手も介さず、宙よりもたらされている。

口元の少し上に氷の塊が浮いているのだ。
融け落ちた水がゆっくりと若者の口元へ落ちてゆく。

「うわごとで水、と呟いていたので吸い飲みを用意させたのだが。
突然氷が現れてな……」

私の説明に唖然とする御殿医長。

最初から見ていた私も驚いた。
有り得ない現象ではないが、問題は誰がこれを行ったか、という事だ。
意識の無いこの者が行える筈もなく、術など何も行使された形跡がないという事実が、さらに疑問を増やす。

思惑していると再び部屋の入口が賑やかになる。

「怪我をしたと聞いた。大事ないか？」

「無事にございます……陛下」

ずかずかと私に近づいてきた国王に軽く首を垂れる。

アイン・シルヴィアート・ガイ・ラクス。
ラクス王国の現国王であり、私の父でもある。

私は国王に本日これまであった状況を報告がてら説明した。
国王は頷き、私に言う。

「それら刺客は二人とも現在尋問中だと、余も報告を受けている。そなたが無事で何よりだった」

少しだけ安堵したような笑みを浮かべ、国王はすぐに表情を引き締める。
まだ執務中であるのに、私の為に僅かでも父の顔を出してくれたことが心より嬉しい。

国王は傍らの寝台に横たわる若者を痛ましそうに見る。

「この者か？　そなたを助けたというのは」

「はい」

言葉少なく返答する。

「刺客はいまだ尋問途中で命じた相手等の事はまだ喋らぬが、二人とも仲間は互いにひとりだと言っておった。槍を持っていた方はし

きりに悔しがっておったぞ。［あの白マントの若造が居なければ上手くいったのに］とな」

「！……では、やはりこの者は……」

「うむ。先程の御殿医長の話と統合すると、無関係の一般人であると思われる」

「……っ」

やはり本当に無関係だったか。

魔物を追い払い適切な処置で私の怪我を治療し、脅威となる筈だったもう一体の魔物も退治してくれた者。

そして、結果的に私の盾となり現在生命の危機に晒されている者。

私の生命は、この者に何度救われた事となるのだろうか。

私の思慮を感じてか、国王は静かに言う。

「恩には義を持って成すべきではあるが。皇太子はどう、考える？」

「は。此度の件に関しましては、恩に恩を持って成したいと思う次第にございます」

国王は私の答えに頷きを返した。

「そなたの考えを支持する」

「有り難うございます」

この者を助けたいという私の思いを、国王はくみ取ってくれた。

皇太子の私の命令で治療をしているとはいえ、今回の様にどこの誰とも知れぬ一介の民に対する治療に城にある薬剤をおいそれと使うわけにはいかない。

王宮にある薬剤は本来、王族や貴族相手の治療の為のものとして扱われるから。

国王の了承を得た事で、行動の幅が広がった医師たちの動きも変わる。

御殿医長は薬剤の追加を部下に取りに行かせた。

入れ替わるようにして神官長と巫女長がこの部屋へと駆け込んできた。

日頃ない動揺した面持ちで国王の元へ参じる。

「こちらに陛下が御出でと聞いて、馳せ参じました」

「何事か」

応答したのは巫女長の方だった。

「現在、この王都に精霊が大挙として訪れております」

「精霊が？」

「はい。まるで国中の精霊が続々と集結しているような有り様で……」

「それは何時頃からだ？」

巫女長は私へと視線を向ける。

「殿下の帰城から、にございます」

「！」

「特にこの王城周りは上空も含め、精霊に囲まれた状態となっております」

巫女長は私をじっと見る。

「お教えください殿下……何を、お持ち帰りになりました？」
「持ち帰ったといえば刺客とその者の武器、そして恩人とその者の荷物だけだ」
「この部屋にございますものは？」
「恩人とその者の荷物だけだが、それが何か？」
「この部屋から、物凄く大きな意思を感じるのです」
と、巫女長はぞくりと身体を震わせた。
「どうした？」
問うが、巫女長は閉められているこの部屋の窓へ突然視線を向けた。
再度声をかけようとして絶句する。
獣の大咆哮が王都に響き渡った。

5　話　　エルケ皇太子（前編）（後書き）

皇太子視点、前編。
リツキ、意識不明中。

リツキとそれ以外の色々な人の視点で、お話がのろのろと進みます。
ゆっくりお付き合いくださいませ。
次回も目指せ五日以内更新。

6　話　　エルケ皇太子（後編）（前書き）

この作品には〔残酷描写〕〔１５歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現〕が含まれています。

１５歳未満の方はすぐに移動してください。

6話　エルケ皇太子（後編）

突如として聞こえた咆哮に、何事かと国王共々窓を開け、外を見る。

「！？」

「な……っ！？」

国王も私も声にならない。

王城内の神殿塔の上に、それらは居た。

「神獣……神龍が何故……？」

国王がぼそりと呟く。

そこに居たのは神獣のひとつである神龍が二体いた。

神獣。
獣の姿を模してはいるが、神が愛し、神の恩恵を受け、神の意を汲む存在。

これまでの歴史で確認されているのは。
神鳥族。神狼族。神虎獅族（しんこしぞく）。水神獣。
そして、それらを統べる力を持つ神龍族。

それらの一族は人間以上の智を持ち、人間の姿を取り語る事も可能なのだという。
それ故か、神獣の加護や恩恵を得ての文化の発展も多々記録に残されている。

けれど。
神獣は、本来人間（ヒト）の世には積極的に関与しない。
何故なら神獣は、人間（ヒト）を愛す精霊を含む自然世界と、人間（ヒト）を害す魔をも護り愛す存在だから。
人間だけを愛でる存在（モノ）ではなく、状況によっては敵対することもある存在（モノ）。
それが、神獣である。

目に映る美しき生き物。
騎竜や飛竜とも違う、大きな体躯。
背には、筋張った骨組みに皮膜のある羽が、二対。
過去から現代にいたるまで、浮彫絵や壁画、蒔絵物に描かれている姿形そのままの姿。
何よりもその神性が、周囲にあるものを威圧する。

この場に来臨した神龍は二体。
一方は真珠のような輝きを持つ白色。
もう一方は黒輝石のような輝きの黒色。
美しいとも神々しいともいえる、その白色と黒色の神龍が空に向かい、交互に咆哮を上げる。

何故ここに精霊たちが集結しているのか。
何故ここに神龍が現れたのか。
何がここで起ころうとしているのか。

解からない事だらけで動きが止まる。

その時。
後方でゴトッ！　と何かが落ちる音がした。

「「！！」」

国王共々振り返り見えたものは、先程まで意識の無かった若者の姿だった。
先程の音は、彼が寝台から落ちた音だと知る。

顔色はまだかなり悪い。息も荒く苦しそうだ。
それでも上体を起こそうとしているのか、床についた腕が震えて

いる。
支えようと、抱えようと、寝台へ戻そうと各々が足を踏み出そうとするが、何故か動けない。

「……許、す……顕、現」

微かに聞こえた声の後、彼の周囲に突如四体の人影が湧いて出た。

「ｓｕｔｒ　ｋｔｍｄ　ｖ　……」

「ｅｏ―」

「……フィー……　ｄｏｏｒｍｌｂｊ」

私の解からない言葉で、彼はその四人と会話をしている。
赤い髪色をした女だろう一人が、彼を抱えるように支え、窓へと歩み寄る。

「ｚｕｅｗ　……」

「ｅｏ―」

「シロ……クロ……　ｃｋｒｉ　ｔｊｔｓｉ　ｉｉｅｍｒ　ｓｈｓ　ｄｉ　ｅｄ　ｒｊｗ　ｐｖｂ　……」

神龍が彼の言葉に呼応するかのように吼える。

「ｔｋｒ　ｄｊ　ｘｎｎ　……　ｄｉｒｍｙ　……　ｑ　……　ｗｏｙ　ｙｕｘ　ｅ」

彼の言葉に神龍の吼え声が次第に小さくなる。

「……　ｅ　ｔｙｄｄ」

彼がそう呟くと、短い吼え声が上がり神龍は北の方角へと飛び去って行った。

神龍の姿が視界から消える。

とたんに彼の身体から力が抜けた。

「ｅｄｌｌ！」

支えていた女が彼を抱え上げ、寝台へと運ぶ。

壊れ物でも扱うかのようにそっと、彼をその上へ横たわらせた。

「ｄｅｏｊ　ｋｇｍ」

「ｓｉｋ　ｋｍｂ」

「ｓｕｌ　ｋｍｍ」

先程現れた周囲の者達が、口々に彼に何かを言っている。

「フィー、ツッチー、ｄｙｕ　ｚｋ　……　ｉｇｚ　ｅ　ｌｖｖｋ　ｄｋｋｒｊ　ｊｍｚｗ　……　スイ、フウ、ｚｖｂ　ｗｊ　ｑｏ　ｂｇ　ｋｌｇ　ｏｔ　……ｉｙｇｎ　ｂｓｆ　ｑｋｍ　……　ｄｄ」

彼は、吐息に乗せるようなか細さで幾ばくかの言葉を紡いでいたが、力尽きた様にまた意識を失った。

大切そうに彼を見つめていた四人の瞳が、一斉に私たちの方へと向けられる。

先程の暖かな眼差しは消え、鋭い刃の様なものへと変じていた。

「解呪」

薄緑の長髪を持つ男の声で、身体の硬直が解ける。

他の者も同様らしい。

ふと目の前の神官長と巫女長を見れば、がくがくとまだ震えている。

私にはそう極端には感じないが、これらの存在は巫女長や神官長には相当の精神肉体的負荷がある様子だ。

もしかすると、特別負荷をかけられているのかもしれないが。

それでも、神官長が声を絞り出した。

「そっ……その色彩、存在……っ……精霊の長様方と、感知致しますが……」

静かな面持ちで薄緑の髪の男性が応じる。

「如何にも。我らはそなた達、人の言う精霊の長である。判りやすく言えば、わたしは風の、な」

濃い水色の髪の女も口を開く。

「わたくしは水を」

紫の髪を持つ男も重い声でゆったりという。

「我(ワレ)は土を」

赤い髪の女も言う。

「吾(われ)は火を」

薄緑の髪の男……風の精霊長が再び口を開く。

「今はまだ制限があるので詳しい事は語れぬ。が、この御方を御護りさせて頂いているのが我らである事を見知りおけ」

語られた内容に、現場の人間全てが硬直する。

火、水、風、土。
それらの下位から高位までの精霊を束ねている四大精霊長。
この若者が、その四柱全てに護られている者なのだという、その言葉の大きさに。

精霊や神々の愛情は深い。
それも、神位が上位になればなるほど、執着しているかのように濃くなる。

だからこそ、それらの祝福や加護を受ける事の出来た人間は重用される。
加護を受けた者が幸せであればあるほど、周囲にもそのおこぼれが生じるのだから。

では、その逆は？

精霊や神々に愛されたものが、不当な扱いを受けてしまったら……どうなる？

これまでの歴史に何度もある人同士の戦争以外の国の滅びは、何によって引き起こされた？

聖魔の寝床が、どの国の領地でもないのは何故だ？

それは、神々の怒り。これに尽きる。

それを、言い伝えだと軽んじる者は居ない。
小さな集落が下位神の怒りに触れて全滅したなどという事は、今

でもある事なのだから。

四大精霊長全てに護られている者。
それは四大精霊長全てに愛されている者だという事。

今、この場に居るその若者を、知らずとはいえ刺客かと疑った。
もし、あのまま死なせてしまっていたら。
私は……いや、この国はどうなっていたのだろうか？

想像するだけで背筋が凍る。
そんな私の耳に、怒りの声が届いた。

「そこの若者！」

火の精霊長が先程火傷を帯びた医師見習いを指さす。

「吾が主の持ち物を隠匿しようとするなど赦し難い！　本来ならば腕ごと燃やし尽くす処だが、吾が主はそういうのを嫌う故、その程

度で済んだ事、吾が主に感謝し額づくがよい！」

怯え、土下座姿勢になる医師見習いを見、溜飲でも下がったのか火の精霊長は風の精霊長へと視線を向ける。

「では、命により出向く」

「承知した」

短い応答の後、火の精霊長は意識の無い若者の手をすくいあげ己の額へと当てる。

「命ゆえ御前を離れます。御無事で」

そう呟き、瞬時に掻き消える。

土の精霊長も水の精霊長へと言う。

「主（ヌシ）さまを任せるぞ」

「言われるまでもございません」

「……御前を離れ、命を全う致します。御安心下され」

火の精霊長と同じ所作の後、土の精霊長もその姿を消す。
それとほぼ同時に、あれほど存在を濃くしていた精霊の冷気の様な気配が半減した。

そういった数瞬の出来事の後、風の精霊長が神官長と巫女長を見る。

「わたし、風と、この水は、この御方を御護りする為、ここに滞在する事となる。何か質疑はあるか？」

問われた二人は一瞬視線を交わしたが、神官長が再び口を開いた。

「精霊長様方に、恐れながら申し上げます。わたくしどもはこちらの御方の名はおろか、どなた様なのかも存じ上げません。差支えなければお教え願えませんでしょうか」

風の精霊長は冷ややかな眼差しを向けたまま、静かに言う。

「名は、主様（あるじ）が御自身で告げられるまでは、わたしの口からは語れない。ただ、主様（あるじ）の立ち位置は、そなた達でも理解できるものである」

「……それは、どういう」

「神職に籍を持つ者が、主様(あるじ)の胸元の光が見えぬとは思えぬが？」

「！」

興奮の連続で、心が落ち着く間もない。

護られているという事は御印があるのだという事だ。

まず先にその事を確認すべきだったと私も思い、視線を若者へと向ける。

身体がようやく動くようになったか、神官長と巫女長は寝台へと足を踏み出す。

水の精霊長と風の精霊長は、寝台枕元の左右で若者を護る様に立っている。

水の精霊長は若者を優しく見つめ、その手を動かした。

若者から流された血や汗、汚物による身体の汚れが、服や寝台に染みたものまで全て、水の精霊長の力で浄化され消されてゆく。

様々な臭いが充満していた部屋の空気も完全に浄化された。

若者が展開していた解毒の術式も、ようやく解毒が完了したのか消えている。

他に傷がないことを確かめている様に、水の精霊長は彼の者の胸をはだけさせた。

神官長と巫女長は、恐る恐るその胸元を見つめる。

だが、その胸元にある光を見た途端、神官長と巫女長は再度、硬

直する羽目に陥っていた。

「「……！」」

神々やその神々に仕える精霊たちに気に入られ御印を授かる。
その事自体はさして珍しい事ではない。
下位の神々や普通の精霊に愛され御印を授かる者は、それほど多いという程ではないが結構居る。

御印の在る者と無い者とでは、同じ材料で料理を作っても味わいが全く違って感じる。
同じ素材、同じ工程で家具を作っても、使い心地や長持ちさが全く違う。

人が持つ元々ある才能に、神々たちがほんの少しだけ手を貸して下さる。
一般的に、御印を授かるとはそういうものだ、という認識が高い。

けれど、それが上位の神々や精霊長などに気に入られ御印を授かる者ともなると流石に少ない。

病や怪我を癒す癒し手を例にあげれば、下位神の御印が在る者であれば軽傷しか癒せないが、上位神の御印が在る者では死に至るような傷でも癒す事が可能となる。
人の持つ元々ある才能以上の力を神々より授かり分け与えられ、それを使用できる。

どちらがより重用されているかは言わずもがなであろう。
実際、城仕えをしている巫女や神官には上位精霊や上位神の御印を授かっている者が多い。

そして巫女や神官の名を冠せられる者は他者の御印を視る事が可能な者だけ。
勿論鍛練あっての事だが、熟練した者であれば、神々にせよ精霊にせよ、それを授けた方々の神位としての立ち位置が上位か下位か、というのは御印を見ればすぐに判るもの。
色彩というか、輝きそのものが違うのである。

下位神の御印は刺青のようにも見て取れる。
上位神へと近付く程、線や輪郭だけのものから単色、多色となってゆく。
これらは全て淡い光を帯びているが、輝くことなどはない。

上位神ともなれば御印が生き物のように鼓動し、動きを持つ事さえある。
さらに神格が上位ならば、それに輝きが加わる。
一般人にはこの光輝は見える事がない。

神官や巫女はそれらの事象や、神々一柱固有の意匠、その御印、そして色彩を神殿で山ほど学んでいる。

目の前にあるのは鼓動し、光輝く上位の御印。
そして、その意匠を固有している神位といえば。

「……精霊王様の御印」
「黒光(くろひかり)とは……精霊王様が、何故？」

精霊王といえば、名こそ王だがその神格は上位神と並ぶもの。
巫女長と神官長が信じられないものを見て口々に呟く。

水の精霊長が若者の服を丁寧に着せ付け、そっと掛布を掛け終えてから静かに言う。

「精霊王自らが、この御方に黒光をと望まれたのです。わたくし達はそれに従うのみ」

風の精霊長は国王に視線を向け、告げた。

「人間(ひと)の王に問う。この御方を、これより先、どの様に扱われるのか」

国王は迷う素振りも見せず胸に右手を当て、寝台に横たわる若者へ軽く頭を下げた。

「精霊王様の御印を胸に頂く御方よ。その御身、囲うもの無き自由である事は明白。されど現在の御容態では御不自由に極まる。故に、恩ある御身をこの城、この国にて賓客として御迎えいたす所存。国王の名に於いて誓おう」

まだ名も知らぬ者に対して、破格の待遇を提示する国王に風の精霊長は頷いた。

「その答えに免じて、これまでの不敬は不問としよう。よき処遇を望む」

「叶う限り。……皇太子、神官長、巫女長。手配をするぞ」

国王はそう言い私達三人を引き連れ、御殿医長に後を任せて退出した。

国王は執務室で神官長と巫女長に訊く。

「殺意に近い負荷であったが、大事ないか？」

「「はい……」」

「精霊長たちの剣呑な様子と、あの者が受けているのが精霊王の御印という事で、急ぎ優遇する決議をしたが。実際、あの者はどういう位置づけにあるのか？」

国王の言葉に神官長が口を開く。

「陛下におかれましては、精霊王様が上位神様方と並ぶ御方である事は御存知かと」

「知っておる」

「上位神様方の加護を授かる者は稀有でございます。そしてその者達の持つ力も、上位神様方の御力の一部を使用できる以上、これも計り知れぬほど大きな事が多うございます」

「うむ。理解できる」

「上位神様の加護を授かっている者はこの国にも御二方おられますが、そのどちらもがこの国の民であり、国と陛下に忠誠を誓う者である以上、あの御二方がこの国に害成す事はあり得ないでしょう」

神官長はそこで大きく深呼吸をした。

「問題は、あの御方が恐らくはこの国の民ではない、という事と、あの御方の御性分を私どもは何一つ知らないという事にございます」

国民であれば王や国に忠誠を誓わせることで枷を付けられるが、そうでない自由民の場合は忠誠を誓わせること自体が難しい。

自由民。

国に籍を置いていない彼らは、国家というものに仕える義務や責務はない、納税する義務もなく、自由だけは十分にある。

が、義務のない代わりに国からの庇護や恩恵といったものは全くといってない。

自由民を国に協力させるには、主に交渉しかない。

金や身分を与える、または国の民として迎え入れる。

よその国を追われた者、元々の身分が低い者などはそれらの交渉を受け入れてくれる事が多い。

けれど、力在る者やお尋ね者ともなると、その程度で交渉が成立することは、まずない。

そこで、その自由民の性分が関係してくるのだ。

何を好むのか、何を欲しているのか。それだけでも判ればその分

交渉がしやすくなる。

別に国に協力してくれなくとも良いのだ。
国に害をなさなければ、そのまま自由でいてくれて構わない。
ただ、この国に害をなさないという確約が欲しい。その為の交渉である。

「交渉はあの者が目覚めてからで十分だと思慮していたが、そなたがそこまで案じるのは何故だ？」

「あの御方の御印は確かに精霊王様のもの。ですが普通の御印……加護ではございません」

「ふむ。加護でないとすると累加などか？」

加護よりさらに強力な力を有す事のできる累加を上げる国王に、神官長は首を横に振る。

加護ならば白光（しろひかり）、累加であれば青光（あおひかり）。
見間違う筈もない……あれは、他の色を全て吸収してしまう黒光（くろひかり）。

「累加の方がまだ安心できます。……あの御方に授けられた御印は［隷属］でございますゆえ」

「な……っ！　あの者は、精霊王様を［使役］できると……そう申すのか！？」

「御意にございます。そして陛下も先程ご覧になったように、あの御方は神獣である神龍とも何やら繋がりのある御様子。……紡がれていた言葉は神聖古代語に音感が似ておりました。あまりにも古い言葉なので私も数語しか聞き取れませんでしたが、あの御方は神龍に［帰れ］と命じられていました」

豪胆で知れる国王も流石に唸った。

精霊王を［使役］し、神龍に［命じられる］。
そのような人間が居るなどと、信じられようか。

それでも。
精霊や下位神を使役できる者は少なからず居る。
だがそれは［貸与］といい、精霊や下位神が気まぐれに使役に応じるというもので、［隷属］の様に強制力はない。
［隷属］とは言葉通り［下僕となる］という事だから。

しかも、上位神である精霊王が自ら［隷属］を授けている。

精霊王をあの者が無理矢理従わせたわけではない。
それは、精霊長があの場で語っている。

［精霊王自らが、この御方に黒光をと望まれたのです。わたくし達はそれに従うのみ］と。

それ故、精霊王があの者に従う事を望んだという事実に恐怖する。

精霊王の姿はなくとも、四大精霊長が居るのだ。
下手な扱いをすれば、まず傍に居る精霊長たちが黙ってはいまい。

国を、国民を守るために。
その様な者を、間違っても敵に回すわけにはいかない。

私は、何という者と出会ってしまったのだろう……
けれど、この出会いがなければ私が死んで居た事も確か。
私は、私の出来る事を探さなければならない。

僅かな時間の後、国王は大臣や宰相達を急遽呼びつけ命じた。
「本日これより彼の御方を国賓位で御迎えいたす。何一つ不自由の無い様、心して準備にかかれ」
国王からの急な指令に慌ただしく城内が動き。
結果、翌日には離宮がひとつ最上級の貴賓室として設えられた。

精霊長達によって離宮に移送された彼の方が、その意識を取り戻したのはそれから二日後の事である。

6話　エルケ皇太子（後編）（後書き）

神龍たちと精霊長たち登場。

7　話（前書き）

この作品には〔残酷描写〕〔１５歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現〕が含まれています。
１５歳未満の方はすぐに移動してください。

執筆日程や近況は活動報告にあります。

7話

意識の奥底に居る俺は、よく知っている波動や波長が、すぐ傍にあるのを感じていた。
こいつ等は優しく、強い。
こいつ等が傍に居るんなら、俺は安心して眠っていられる。
ああ、そうだ。
身体の方はどうなったんだろう？

少しだけ意識を外に向け、肉体が保持されている事に安堵し、解毒がまだ終わってない事に落胆した。
痛いのも苦しいのもキライだ。
もう暫く、意識を閉ざそう……そう思った時。

俺の魂を、意識を揺さぶる声が、意識の奥まで届く。

「お父さまーッ！　どこぉーーーーーー！？」

「父上！　どちらにおいでですっ！？」

……何事ですか……って。

あああああああ！
突然意識かっとんだから、あの子らに誰にも伝言頼んでねぇ！

マズイわー……俺の、あれほどの出血にあの子らが気がつかない筈ないってのに！

「お父さまぁあああ！！」
「お応え下さい！　父上！」

どこだよここ。町とかだったら大騒ぎになるって。
とにかく、あの子らを安心させて帰さないとっ……

俺は意識を浮上させてゆく。
無茶キツイ！
でも！
身体重いけどっ、起き上がらないと……

ゴトッ！

痛ったー……（涙目）
うう……寝台だったのかよ……
あああ解毒完了まだかよ、ホントに息苦しいわ……

＜　主、大丈夫か？　＞

＜　あまり無茶をするでない　＞

傍に居る精霊長たちの声が心話として脳裏に届く。
目蓋を開けるが、その姿がうっすらとしか見えない。身体も重い。
なに？　ブラックアウトとか……そんなに出血多かったの？

＜　今動くは危険すぎる……我らに許可を　＞

＜　顕現の許可を　＞

何か周囲に人間が沢山居る気配するけど……仕方ないね。

「……許、す……顕、現」

口も舌も上手く動かせなかったが、何とか形式上の言葉が呟けた。
人間が居る時は口頭でないと顕現できないっていう決まり、変えようかな……

＜　も、あとは古代語でいくよ……ツライ　＞

＜　了承した　＞

顕現したであろう精霊長たちに心話で伝える。
短い音に言葉を詰めてある古代語は、心話よりも負担が少ない。
ゆっくりと、吐く息に古代語を乗せた。

「あの子らは、外……？」

「うむ」

「……火（フィー）……窓があったら、そこへ」

力強く支えられ半ば浮いた状態で、窓まで連れて行ってもらう。
殆ど見えないが、あの子らの気配がする方向を向く。

「声を、あの子らに繋いで……」

「うむ」

「白龍（シロ）……黒龍（クロ）……　俺は、無事だから。こんな所で泣かないで、家に、帰りなさい　……」

「お父さまいたー！　うわーん！　よかったー！」

「父上御無事で！　凄い出血の御様子でしたが、大丈夫なのですか！？」

シロとクロが盛大に声を上げる。
声が繋がったことで、俺の居場所がはっきりとわかったんだろう。

「うん。無事だけど、まだ当分、動けそうにない」

「わたし、運ぶー！」

「……ヤメテ、今それされたら、ホントに死ぬ」

シロの飛び方は速くて豪快の一言に尽きる。
一度乗ったけど、殆ど絶叫マシーンと変わんない。

「では、わたくしが」

クロの飛び方も速いが、こっちは割と安定した飛び方ができる。
ま、シロに比べればマシって思うけど。

「それも却下。ここ、人間が沢山居るよね？　物を壊したりしないで、人も怪我させないでそういう事出来ないでしょうが……シロもクロもまだ、そこまで器用じゃない」

「あうう」

「ですが……」

駄目なものは駄目なの。
ため息が出るよ、もう……

「それに。……俺、留守番してなさい、って言ったよね？」

「あー……」

「う……」

「心配してくれたのは嬉しいけど、約束はきちんと守って。そうでないと一緒に暮らせなくなるよ？」

俺が光の森で暮らしている理由のひとつがこの双子の神龍、シロとクロ。
俺は、縁あってこの子らの実の親から頼まれて、現在この子らの養い親をしている。
養う約束は、この子らがオトナになるまでなんで、あと数年は必要。

養い親となった時、シロとクロは人間で言う三歳くらいだったけど。
その時に［俺を親と思うなら、きちんと俺の言う事をきくように］って事を約束させた。
互いを信じてないと、約束って出来ないからね。

「それはいやぁ……ごめんなさぁい」

「申し訳、ありません」

シロとクロ双方からの謝罪に安堵する。
反省も大事。
うんうん。この子らの心も、ちゃんと育ってるね。

「そう……わかったなら家に戻って。後で、必ず連絡するから」

「うん」

「はい」

「道草しちゃだめだよ？」

「「はーい」」

いいお返事だ、うん。
シロとクロの羽ばたきの音が次第に遠ざかる。

もう、いい、かな……？
限界。
立つのもキツイ。

「主！」

足の力が抜けた俺を火（フィー）が咄嗟に支えてくれたのは嬉しいんだけど。
男の俺が女性に姫抱っこで運ばれるのって、どうよ？
再び寝台に横にされた俺は苦情の嵐を受けた。

「大丈夫ですか！？」
「大事ないか、主（ヌシ）さま」
「無茶はお止め下さい」

うん。ごめん。
息するのも苦しい……無茶なの判ってるけど、伝えとかないと……
こいつ等も、大概無茶するから……

「火（フィー）、土（ツッチー）、悪いけど、家に戻って、あの子らに付いていてやって？
……放っとくと、また何しでかすかわかんないから……水（スイ）、風（フウ）は、
このまま俺の傍に。人間語で、他の人間との対話も許可。……でも
人間に、ヘンな事、吹き込んだりとか……高圧的に、命じちゃ、ダ
メ、だからね……ゴメ……も、ムリ、ねる、あと、た、む」

言うだけ言って意識を手放した。

意識が表層へとのぼる。
まだ脳裏がぼんやりとした状態で目を開けた。

うん。今度は周りがはっきりと見える。
さっき見えにくかったのは熱があったからかな？　なんか暑かったし。
今は逆に、ちょっと寒い。

傷の治癒も解毒も終わってる筈なのに、怠さが取れてない。
息苦しいし、身体が凄く重い。

俺は左側に見えた水色の後ろ髪に声をかける。

「スイ……」

思った以上に声が掠れる。
スイは小さい声にもかかわらず振り向いてくれた。

「あるじ様！　意識が戻られましたか！」
「ん……ちょ、と声、掠れ、けど」
「すぐに癒しますわ」

スイの手が喉から胸に軽く流される。
間もなく喉の通りが良くなった。

「楽に、なった。ありがと……でも、息、苦しさ、取れて、ない」

肺がきちんと機能してないのか、上手く呼吸できない。
スイは申し訳なさそうな顔で言う。

「それに関しては、少し時間が必要となります。血が、流れ過ぎましたの。血量が元に戻るまでは小さな治癒術しか仕えません」

血の流れは生命の流れ。
カミサマならともかく、人間や精霊は無から有は創り出せない。
病にせよ怪我にせよ治癒を促進させるには、まず栄養が必要。
栄養のカタマリである血液そのものが足らなければ、まともな治癒術は使えない。
かといってこの世界のこの時代には、まだ輸血術とかないしね。

治癒術だけで言うなら、水の精霊は自然から力を抜き出し、それを対価として術を行使する事が出来る。
けれども俺の今の状態みたいに弱り過ぎている場合は、その術では強すぎて肉体という器そのものがもたない。
さっきの喉の調子を癒してもらった力にしても、恐らく本来の術に使う力の千分の一にも満たないんじゃなかろうか。
物凄く微調整が要るって、以前聞いたし。
そういや俺の血、どのくらい減ったんだろ？

「……どんだけ、流、れたの？」

「全血量の一割半ほど。その上で傷の賦活と解毒の術式を展開させましたでしょう？　それに使用された血量を含めると、致死量寸前でしたのよ？」

「……ぎり、ぎり？」

「はい。そして、今回はおまけがあります」

「な、に？」

「毒は解毒されましたけど、その毒素の影響で心筋は半減のまま。あと血が足らない分、他の筋肉組織が術式で蘇生細胞等に転換された結果、あちこち減ってます」

にっこりとスイが微笑む。……コワイ。

「栄養をしっかり摂って体力を戻されるまで、あるじ様に魔方陣の使用制限が掛けられました」

「どの、程度？」

「ＭＡＸ一歩手前位ですかしら？　詳しくは風の方にお聞きになって」

「……フウは？」

「ここにおります」

名を呼んだ瞬間、薄緑の髪の持ち主が右手側に現出した。

「御目覚め、随喜にございます、主様」

にこやかな笑みに見えるけど、目が怖い、目が！

「笑顔、怖いよ、フウ」

「主様が無茶ばかりなさるからです。あの時も、御呼び下されば」

「あの、時、は……呼べ、なかったん、だって」

あれだけ人間の居る前で、しかも無詠唱で精霊長とか呼べるかっての。
下手すりゃこいつ等押しのけて精霊王自ら出てきそうだし。

呼んだら呼んだで、あとで絶対に困ったことになる。
樹海に無詠唱で精霊長とか精霊王を呼べる人間が居る、なんて変な噂が起こらない様にとか。
俺を傷つけたから、とかいう理由でその場に居た人間全部殺しちゃいそうなんだもん。
そっちの方がよっぽど無茶だと思う。

んな事になったら、樹海で生活する事が困難になるの判り切ってる。
かといって、シロとクロを養ってる最中だから、まだ今は聖魔の寝床から出ていけない。
そうなると後はもう［光の森］に何年もカンヅメになるしかない。
ようやく薬師としての仕事が順調に進んでるのに、身動き取れなくなるのは困る。

そんな事をつらつら思っていたら、フウの目のきつさが緩んだ。

「精霊王様は勿論の事。御上（創世神さま）さま、かなり御心配なされてましたよ？　御上（創世神さま）さまよりの御伝言です。『暫く大人しくしてなさい』との

事です」

「……これじゃ、何も、出来ない、って」

実際、物凄く身体が重い。

血量と、目減りした筋肉組織が元通りになるまでは、どうしようもないだろう。

「現在、主様の使用される術の殆どに御上さま（創世神さま）から制限がかけられています。主様が術を使おうとしても魔方陣すら出せない様にされていますので、何か必要な時はわたし共をお使いください」

「わかった。……あの子ら、無事に、帰った？　元気、してる？」

「ええ。お元気ですが、御子様方もかなり心配してました。火と土も同様です」

「フィーと、ツッチー……かなり、面倒、かける。後で、伝書、頼む」

と……大事な事を聞くのを忘れていた。

「で、俺が、森で、意識、なくして、何、日？」

「おおよそ三日程ですか」

三日かー……それだけ寝てるのに疲労感、半端なくあるねぇ……
空腹感が中途半端にあるけど、まだ何か口に入れたいって思えない。
あー……内臓も筋肉繊維かー……弱ってるのねー……
そっか……
フツーならすぐに心話に切り替えようとするのに、俺が声出すの、止めないの……
肺活の様子見ながら、なんだ。
気配り嬉しいけど……も、ちょっと頑張る……

「じゃ、その、間の、栄養、排泄、は？」

「わたくしが行っていますわ。栄養は直接糖質で、排泄は事後浄化で」

成程、だから妙な空腹感になってるのか。
オムツですらないってのは、絶対安静扱いって事だろうし……
手間かけて悪いね。

「そう、ありがと。でもさ、何で、ちょっと前、見た、部屋と、今、違うの？　着てる、服も、俺のと、違うし」

あの子らを家へと帰すために起きた、あの時にうっすらと見えた部屋の様相と、この部屋の様相とは明らかに違う。
何より広い。あと、家具とか、かなり豪華だ。

思い当たる節にどんよりしながら一応、訊いてみる。

「それに関しては、そろそろ当事者が来ると思います」

フウがそう言うって事は、もうここに誰かが来る気配を感じてるって事。
じゃあ、こっちも内緒話が要るね。
俺は知っててても、他の人間には知られちゃいけない事が色々あるから。

「……心話、の、許可、は？」

「わたし共からの力の供給であれば使えます」

「判った……フウ、スイ……繋げ、といて」

「「はい」」

部屋の扉がノックされる音が聞こえた。

「精霊長どの、入室して宜しいですかな？」

扉の外からの声にフウがこっちを見る。
了承の意を込めて、俺は軽く首肯した。

「どうぞ」

フウの言葉に扉が開かれ、数人が室内へと入ってきた気配がする。
扉は足元の方向にあるらしいし、俺は寝た状態のままなので正確に何人なのかは判らない。

寝台に近づいて来て、ようやくはっきりとその様相が判った。
女性が一人、あとの四人は男性のようだ。
略式みたいだけど、全員がきちんとした礼装を着けている。
自然に眉がしかめられた。
これ、応対するのかぁ……面倒な事にならなきゃいいけど。

顔だけ動かし、寝台から二メートル位離れて立つ人達を見る。
前列に壮年と青年、後列に残りの三人。
前列の一人には見覚えがある。あの時助けた青年だ。
壮年の方が口を開く。

「風の精霊長殿、こちらの御方と会話をしても宜しいか」

フウが俺を見たので首肯した。

「良いでしょう」

壮年が俺を見つめ、言う。

「意識が戻られたと聞き、安堵し申した。お加減は如何ですかな？」

さて、まずは普通に……

「申し、訳、ないの、ですが……起きた、ばかりで、現状が、把握、できて、いません……まず、お聞き、したい……ここは、何処で、貴方、方は……どなた、ですか？」

「……ここはエルレ大陸が東、ラクス王国の王都ソルデイン。その王城内の離宮になり申す」

王都か。森から随分遠いな……

しかもここ城の離宮なのかよ、御貴族様じゃなかったってか。

「余はこのラクス王国の国王アイン・シルヴィアート・ガイ・ラクスと申す。隣にいるのは皇太子のエルケ・フィリリアド・セル・ラクス。……後ろに控えるは我が城の神官長と巫女長と御殿医長である」

皇太子以下が軽く会釈してくる。
さて、困った。どう応じよう？
気になるのは何で国王が王冠被ってないのか、って事。
普通職務中は頭にあるものでしょ？　あれ。
フウ、何かしたのかな？

＜　フウ。国王が王冠付けてないのって、何でだと思う？　＞

＜　恐らく、主様に対する誠意ではないかと。先程までは付けてましたから　＞

＜　……そう　＞

先程まで、って。
もしかして、さっき俺の呼びかけに転移してくる前、フウは国王の近くに居たって事かよ。
うーん。何の話してたか気になるなー……

＜　彼らに何を求めたの？　＞

＜　主様をどう扱うのかと問いはしましたが、こちらからは殆ど何

も求めておりません。現在の主様の状態は皇太子の恩人だという事で国賓扱いとなっています　＞

＜　相手からの申し出かぁ……でも、国賓て。……もしかして、彼等、俺の御印を見てる？　＞

＜　はい。精霊王様の黒光を確認されているかと。あと、神龍を含めて古代語での会話も見られています。まぁ、言葉までは聞き取れていないでしょうが　＞

そういう事。
なら、違う方向からいかないとマズイね。
暫く世話になってもいいけど、俺の力とか利用とかされるの嫌だし。
まともな対応が出来ない相手だったら、すぐにこの場から去らないと。

「スイ、起こ、して」

うまく身体に力が入らないので、スイに上半身を起こしてもらい、寝台に両手をついた形で俺は国王たちにゆっくりと頭を下げた。
自分の行った行動に、息をのむ様な感情が伝わってくる。

「まだ、身体が、よく、動かぁ、故……跪座も、できま、せぬが……知らずとは、いえ、皇太子、殿下、へ、相対し……無礼な、言動を、致しました、事……重ねて、謝罪、申し、上げ、ます」

さすがに一気に言うと息、苦しいな。

「これ、以上、御迷惑を、かけぬ、様……すぐに、御前から、退去、致します、心づもりに、ございぃ、ますれば……失礼を、お目こぼし……下さぃ、ます、様……」

きっつー……息が上がってきた……
息継ぎすら上手く出来ない……

「どうか、頭を上げてくだされ」

国王がそう言い、俺の目の前に来る。
言葉を止め、呼吸に専念していた俺はその気配に少し顔を上げる。
視線が合った国王は心配そうに言う。

「さ、まずは背を楽な位置に」

何とか予定通りの流れになってきた。

スイの説明も聞いたし、死にかけてた自覚もある。
現在も息するだけでキツイ。

見ればわかる程弱っている状態の人間が一方的に喋っている。
それを止めないで最後まで聞いているような人間が、まともな思考をしているとは思えない。
会話を途中で止めないような人間だったら、フウに頼んで無理やりにでも光の森に転移してもらうつもりだった。

＜　スイ、背もたれ頂戴　＞

このまま横になったら寝てしまいそうだ。
スイの用意した背もたれに重い身体を預け、呼吸を落ち着けてゆく。
国王はまだ、すぐ近くに立っていた。

「まずは、我が息子の生命を救ってくれた事を感謝する」

国王は俺に頭を下げ礼を成す。

御印の所為で俺を高く買ってるのかな？
フツー国王はパンピーに頭下げないって。
言葉づかいが少しぞんざいになってるのは思惑通りで嬉しいけどさ。

でも、もしこれが一人の人としての言葉なのだとしたら。

ラクス王国の国王はいい政治をしてると聞いていた事と合わせると、この国王は本当に傑物なのかもね。

国王は続けて言う。

「皇太子だと知らぬが上の言動に無礼も何もない。却って見知らぬ他人であるのに、その上で救いの手を差し伸べてくれた事そのものを有り難く思う」

「……寝覚めが、悪いと……そう、思った、だけ、です」

これは本当に、俺の本心。

「理由が何であれ、皇太子の恩人には違いない。こちらの方こそ申し訳ないのだ。皇太子と間違われて生命にかかわるような大怪我をさせてしまったのだからな」

「間違われ……ああ……マント、か……それで……」

でも、後ろから襲われたから、誰にやられたか知らないんだよね。その人、どうなったんだろう？

今度聞いてみないとな。

「恩ある方を、まだ怪我の回復もしていない状態で放逐するなど、それこそ人道にもとる。ましてやその方が精霊王様の御印を戴く方ともなれば、国賓として迎え入れるは喜びでしかない。侘びも礼も、満足にしてはおらぬ。せめて、身体が回復されるまで、どうか国賓としてのもてなしを受けては貰えないだろうか？」

身体が回復するまでのもてなし、ときたか。
悪くない申し出だけど、あと少しだけ。

「礼儀、とか……言われ、ても……判り、ませんよ？」

使えない事はないけど、いちいち敬語使うのめんどくさいし。
言葉使いひとつで目くじら立てるような場所じゃ心も身体も休まらない。

「対等対話は国賓の権利。言葉も普通で構いませぬぞ」

うん。なら、不敬罪とか言われずに済むね。
じゃあ、最後にひとつ。

「……俺の、御印を、知る、者と……古代語……それらに、関する、情報に……枷、を、付けさせて、貰える、の、なら……滞在、しても、いい」

これが、一番大切な事。
大きな力を目の前にしてしまうと、それを利用してやろうと考える輩は何処にでもいるから。
国王は少し考え、口を開いた。

「枷を付ける事、承知いたした。ルクス王国国王として、四大精霊長の加護者の来訪を心より歓迎する」

うん。俺が言いたかった事をきちんと認識してくれている。
これならきっと、大丈夫だ。

＜　フウ、枷がけ、事後込みの方で、頼むね……あとの諸々は、人間側の都合も、考慮、相談すること　＞

＜　はい。お任せくださいませ＞

俺は了承の意思を込めて国王へ微笑んだ。

「俺の、名は、リツキ……暫く、お世話に、なり、ま……」

駄目だ……息がし難い……
これ以上意識保つのも無理そう……

＜　会話、終了……も、喋る、きつ……スイ、胸、痛……苦し……＞

＜　判りました。どうぞ、そのままお眠り下さいませ　＞

胸にスイの手が当てられる。

言われた通り目を閉じ、俺は痛苦しさから逃げる様に意識を手放した。

7　話（後書き）

主人公、やっとお目覚め。

8　話　　ラクス国王アイン（前書き）

この作品には〔残酷描写〕〔１５歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現〕が含まれています。
１５歳未満の方はすぐに移動してください。

執筆日程や近況は活動報告にあります。

8　話　　ラクス国王アイン

皇太子の恩人を国賓として迎えて約二日が過ぎた。

意識が戻るまでは極力、離宮への人の出入りは抑えるよう水の精霊長に指示されたので、御殿医長と数名の医師以外、あれからはまだ一度も足を運んでいない。

用事のある時は風の精霊長が自ら、余の執務室へと来る。

現在ただ今も、その来訪を受けていた。

風の流れが悪いので家具の配置を少し変えたい、との申し出だった。

すぐに了承したが、突然、風の精霊長が顔色を変えた。

「如何なされましたかな？」

「……主様が御目覚めになられた御様子で。呼ばれましたので、これにて失礼を」

軽く会釈し、そのまま風の精霊長は姿を消した。

余はすぐに他の者に伝令を飛ばし、自身も身繕いを整えた。

余は皇太子以下、最低限の人員で離宮へと望む。
目覚めたとはいえ、体調が良いとは限らない。
すぐに入室させて貰えるかどうかは不明だ。

部屋の前で一度、他の者達を見遣り、たがいに頷き返してから部屋の扉を叩くよう立哨兵に命じる。
本来であれば中への声掛けも立哨兵か下の者にさせるべきなのだが、余がこちらに出向いてきたという事をすぐに判ってもらうには余が直接声を上げる方が早い。

「精霊長どの、入室して宜しいですかな？」

「どうぞ」

了承の返答が来た。
という事は、多少であれば会話が可能なのかもしれぬ。
無理なのであれば精霊長がこちらへ来て説明するであろうからな。

開かれた扉から、室内へと入る。
付いてきた護衛が扉で止まり待機した後、余は寝台へと近づいてゆく。
彼の者は横たわったままの姿でこちらを見ていたが、その眉が少しだけ顰められている。
見え難いからなのか、それとも警戒しているのか、判断が付け辛い。

寝台の傍まで寄り、こちらの所作をつぶさに見ている風の精霊長に声をかけた。

「風の精霊長殿、こちらの御方と会話をしても宜しいか」

風の精霊長は意をはかるかのように彼の者を見た。
小さくではあるが頷いた事が判る。

「良いでしょう」

風の精霊長の口から許可を得、余は彼の者に向かい口を開いた。

「意識が戻られたと聞き、安堵し申した。お加減は如何ですかな？」

柔らかな雰囲気で相手の警戒を解こうという心づもりではあったが、彼の者の表情は硬い。

「申し、訳、ないの、ですが……起きた、ばかりで、現状が、把握、できて、いません……まず、お聞き、したい……ここは、何処で、貴方、方は……どなた、ですか？」

身分という制度がある以上、足場が判らなければ会話も成り立たぬ。

その事を理解した上での質問に、余は温和な態度を崩さずに彼の者へ告げる。

「……ここはエルレ大陸が東、ラクス王国の王都ソルデイン。その王城内の離宮になり申す。余はこのラクス王国の国王アイン・シルヴィアート・ガイ・ラクスと申す。隣にいるのは皇太子のエルケ・フィリリアド・セル・ラクス。……後ろに控えるは我が城の神官長と巫女長と御殿医長だ」

彼の者は、余の紹介に少しだけ目を瞠り視線を外す。

僅かな沈黙の後、少しだけまぶたを閉じ、開く。

「スイ、起こ、して」

彼の者の言葉に水の精霊長がすぐに従い、その上半身を起こす。

のろりとした動作で彼の者の両手のひらが寝台へ置かれた。
まだ力が入らないのか、上半身を支えるその腕はやや震えている。
大丈夫なのだろうかと思う中、彼の者の頭が深く下げられた。

「まだ、身体が、よく、動かない、故……跪座も、できま、せぬが……知らずとは、いえ、皇太子、殿下、へ、相対し……無礼な、言動を、致しました、事……重ねて、謝罪、申し、上げ、ます」

高階級でも通用しそうな流暢な言葉が彼の者の口からこぼれ出た。
ただ、息継ぎの度に苦しそうな呼吸音が聞こえている。

「これ、以上、御迷惑を、かけぬ、様……すぐに、御前から、退去、致します、心づもりに、ございい、ますれば……失礼を、お目こぼし……下さい、ます、様……」

苦しそうな呼吸の中、ゆっくりと。
それでもはっきりと意思を伝えてくる彼の者に、余は声をかける。
これは、止めざるを得ない。

「どうか、頭を上げてくだされ」

寝台に数歩歩み寄り、彼の者のすぐ側へと立つ。
こちらに軽く視線が向けられたが、その顔色は良くない。

「さ、まずは背を楽な位置に」

彼の者は視線を水の精霊長に向けた。
水の精霊長は即座に背もたれを用意し、彼の者の身体をそれに預けさせる。

大きな呼吸が幾度か繰り返された。

今度はこちらが、彼の者に対して言葉を選ばなければならなくなった。

彼の者の言葉は終始、謝罪と退去の意、だけだった。
普通ならば、少しでも相手に気に入られようとして社交辞令的に発せられる様々な賛美の言葉。
ましてや一国の王を目の前にして追従するのならば、もっと他の言い回しがあるだろうに、それがない。

また、こちらだけに名乗らせて、彼の者はまだ己の名を明かそうともしてない。
先程のようなきちんとした儀礼をとれる者が、己の名を相手に返さない理由。
それはつまり、すぐにでもここから消え去る用意がある、という事。

であれば、高圧的に接するのは論外。
逆に相手の希望を最大限に汲みとらねば、恐らく二度と彼の者に会うことはないであろう。
こういう相手は、同目線を好む傾向が強い。
余は静かに言葉を紡いだ。

「まずは、我が息子の生命を救ってくれた事を感謝する」

国王としてではなく、ひとりの人間として。
心を込めて頭を下げた。

「皇太子だと知らぬが上の言動に無礼も何もない。却って見知らぬ他人であるのに、その上で救いの手を差し伸べてくれた事そのものを有り難く思う」

自分の言葉に、彼の者が僅かに苦笑する。

「……寝覚めが、悪いと……そう、思った、だけ、です」

あまりにも簡単な理由に驚いた。
が、その理由が嘘ではないのだろうという事も、何とはなく判った。

「理由が何であれ、皇太子の恩人には違いない。こちらの方こそ申し訳ないのだ。皇太子と間違われて生命にかかわるような大怪我をさせてしまったのだからな」

「間違われ……ああ……マント、か……それで……」

納得がいったのか、軽く頷きがあった。
これならば、こちらの希望を呑んでもらえるやもしれぬ。

「恩ある方を、まだ怪我の回復もしていない状態で放逐するなど、それこそ人道にもとる。ましてやその方が精霊王様の御印を戴く方ともなれば、国賓として迎え入れるは喜びでしかない。侘びも礼も、満足にしてはおらぬ。せめて、身体が回復されるまで、国賓としてのもてなしを受けては貰えないだろうか？」

一度目を閉じ、ゆっくりと息を吐き。
彼の者は再び我を見つめ、口を開いた。

「礼儀、とか……言われ、ても……判り、ませんよ？」

先程あれだけまともな言葉を操りながら、今更礼が取れぬという。
察するに、堅苦しい事はしたくないのであろうな。
では、その意は汲むのが一番。

「対等対話は国賓の権利。言葉も普通で構いませぬぞ」

彼の者に僅かに笑みが浮かぶ。
が、すぐにまじめな表情に戻った。

「……俺の、御印を、知る、者と……古代語……それらに、関する、情報に……枷、を、付けさせて、貰える、の、なら……滞在、しても、いい」

自身の持つ御印と古代語に係わる事柄を秘密にしてくれ、という事か。
確かに、大きすぎる力は争いの元となる。
それは余も望まない行く末だ。

行動や会話に付けられる枷は明らかに不自由なものではあるが、見も知らぬ者を助けるような人物が、極端に重い枷を付けるとは思えぬ。
しかも隠す事柄が御印ともなれば、決して完全に隠しきれるものではないのだ。

御印は、視える者には視えてしまうもの。
多少の誤魔化しは可能だが、対外的に穏便に済ますのだとしたら。
そして、彼の者がそれを国王である余に問う、その本意は。

脳裏に浮かんだ自分の考えを、そのまま口にした。

「枷を付ける事、承知いたした。ルクス王国国王として、四大精霊長の加護者の来訪を心より歓迎する」

余の言葉に安堵したのか、彼の者が浮かべた微笑みに、了承の意思を感じ取れた。

「俺の、名は、リツキ……暫く、お世話に、なり、ま……」

ゆっくりと名を告げ、彼の者……リツキ殿は目を閉じる。
呼吸が荒い。
水の精霊長の両の手のひらが、静かにリツキ殿の首元から胸へと当てられた。
呼吸が僅かに止まり、リツキ殿の身体から一気に力が抜ける。
すぐに呼吸は回復したが、その息は浅く、速い。
突然意識を失った様子と合わせて体調を案じたが、数分ほどして呼吸が落ち着いてきたので、ほっとした表情の水の精霊長に尋ねた。

「かなり無理をされていた様子ではあったが……大丈夫ですかな？」

「止まりかけた心臓は無事に稼働しましたから、とりあえずは」

空気が、冷えた。

具合が悪化したようには見えたが、まさかそこまでとは思わなんだ。

「あれだけの血が流され、あちらこちらの筋組織が半減している今、あるじ様の御身体は鉛の様に重く感じられ、呼吸する事すら苦痛が伴っている筈。現在はまだ、危険な状態からは脱してないという事、しかと意識に刻み付けられるが宜しい」

水の精霊長の言葉が氷の様に心に刺さる。
気づかずとはいえ、無理をさせてしまったこちらに非がある事だ。

「そこの御殿医長であれば、回復にどれほどの時が必要なのか理解しておろう？」

水を向けられ、御殿医長が頭を下げる。
一時は危篤だと判断せざるを得ない程、酷い状態だったのだ。
血量の回復、筋力の回復、どちらにも時間がかかる。
それらをざっと考慮したうえで見解を述べた。

「こちらの御方様の本来の体力を存じませぬが、無理のない動きが出来るまで六から七月程度かと」

「確かに。が、あるじ様はすぐ無茶をなさる。……そなたの予想より恐らくは二月は早く回復される筈」

「無茶をして長患いになるのではなく？　回復が早く、なる？」
「少しでも動けるとなると、あるじ様御自身で、御自分に合った薬剤を調合し、服用されてしまうでしょうから」
「……やはり、薬師様でいらっしゃいましたか」

軽く水の精霊長が頷く。

「わたくし達精霊はあるじ様を御護りすると同時に、あるじ様に使役される者。わたくし達があるじ様のなさろうとされる事を無茶や無謀と判じても、あるじ様から主命を受ければ、命じられた事柄を履行しなくてはならず、止める手立てがない。止められるのは、あるじ様が御自身で認められた人間（ヒト）だけ。……それを踏まえ、御殿医長にその尽力を望む」

水の精霊長の言葉に驚く御殿医長。
容体の変化には気づいていたが、それを止められずにいた事への咎めかと思いきや、口に乗せられたのは自分への協力の要請。
窺うような視線を水の精霊長へと向けると笑みを返された。

「会話を止めよう、と。国王に声をかけようと、幾度も逡巡していた……その心掛けを酌んで。名のりを許します」
「……ラクス王国、王室御殿医長ニール・ロウ・パルカウムと申します」

頭を下げ礼を取ると、再び声がかけられた。

「御殿医長ニール・ロウ・パルカウム。そなたに、あるじ様を患者として扱う事を許可しましょう。善き配置、善き看護を望みます」

「御意向に沿える様、精進致します。……辛口でも、宜しいでしょうか？」

笑みを浮かべたまま水の精霊長は応じた。

「許可します。……存分にどうぞ」

「承知いたしました」

御殿医長が礼をとり終わるのを待っていたかのように、今度は風の精霊長が口を開く。

「主様が先だって移送された室内外で。また現在の室内外他で関連、見知っていた全ての者達に、今しがた［枷］をかけ終えた。それらの事を真実知る者同士だけの場合を除き、口に乗せることも書を記すことも出来ぬものである。勿論、心話使いにも読めぬし、伝えられぬ。また、これより先、主様がそれに係わる会話をなされた際にも追加で［枷］に組み込まれる仕組みとなっている」

「元より承知いたした事」

余の言葉に頷きを返し、風の精霊長は続ける。

「わたし達精霊長は、主様の御傍でその命に従う者。この数日で理解しているであろうが、単身でも配下を使えば御傍を離れずとも雑務はこなせる。が、主様は此度の滞在に［人間（ひと）の事情、都合を思慮せよ］と、わたし達に命じられた。一国の国賓ともなれば、内外問わず人間側の諸事情、対応がある事は知っている。わたしとしては、やや不本意であるが、主様の身の回りの諸雑事をこなす従事者の選定を国王に任せたいと考えるが、如何に」

どのような伝達がされたかは判らぬが、リツキ殿はこちらの事情も考慮していたらしい。

動く事もままならぬ、あの状況で……だ。

頭の回転の速い御方だと感嘆するしかない。

だが、ここは有り難くこの申し出を受けるが最良。

「善き者たちを選定することを誓おう」

「欲得や打算が入る者は不要。また淡々と職務だけをこなす者や、主様や我等を畏怖しすぎて会話ひとつまともにできない者も不要。望むべきは主様に好意を持つ者のみ」

「考慮致そう」

国王以下、精霊長たちに与えられた責務をこなす。

急遽、選抜会議が開かれ、幾人かの人員の選考が行われた。

翌日、決定された者達を精霊長達へと引き合わせる。
選抜された者達は、まず精霊長達によって再度面接を受け、さらに幾つかの説明をされ、それらを許容した者達だけが世話係として認可される事となった。

最終的に認められ、賓客付きの傍仕えとされたのは五人。
彼等は賓客であるリツキを主とし、この離宮で生活する事となる。

が。
昨日の無理がたたったのか、リツキはその日一日、目を覚ますことがなく。

離宮の主が、彼らの紹介を受けるのは、そのまた翌日であった。

8　話　　ラクス国王アイン（後書き）

そろそろ、眠ってばかりのリツキを起こさないと（笑）

9　話（前書き）

この作品には〔残酷描写〕〔15歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現〕が含まれています。
15歳未満の方はすぐに移動してください。

今回、排泄に関する部分があります。食事中の方等、お気を付け下さい。

執筆日程や近況は活動報告にあります。

9話

リツキです。

目が覚めたら知らない人間が目の前に居て、ちょっとビビリました。

意識失った後、あれから約二日も眠ってて、今も朝じゃなく昼過ぎなんだそうで。

まだ拍動が弱いという理由で、本日もスイから絶対安静を言いつけられました。

で。

フウとスイから、俺が眠っていた間の状況の説明を受けた後、離宮で生活する間、俺専属になるという人間の使用人との顔合わせと挨拶をされた。

男性二人と女性が三人。

直接俺と係るのはこの五人だけど、離宮内には他にも十名ばかり使用人がいるらしい。

でも、いきなり使用人って言われても、何かピンと来ないんだよね。

あと「リツキ様」とか呼ばれてこそばゆい。
王や長含めて精霊たちからそう呼ばれるのは、色々な事情もあってようやく慣れたけど、人間からそう呼ばれると違和感ばりばり。
なのに、こっちからは呼び捨てじゃないとダメだっていうし。

この五人、全員爵位持ってる名家の人達なんでしょ？

「俺、一般人なのに、様づけ、されていいもんなの？」

「あるじ様の立ち位置は、その身の御印がわたくし達四精霊長のものだという国王の言葉によって、伯爵と侯爵の間辺り……ほぼ侯爵よりの扱いを受ける事になるかと。様付けは妥当というより当然でしょう」

口頭での説明の後、フウから苦笑じみた心話が飛んでくる。

＜　元の世界でのあるじ様の血筋は公爵位であったと、御上様よりしっかりとお聞きしていますが？　＞

＜　天界に居る時、ティ・リアから一条本家の血筋だって事は俺も一応説明受けたけど。爵位なんて、あの時代にはもうそんな権力とかないものだったし、実感なんてないよ。おまけに今は世界も違うし、身体も違うじゃん……　＞

血と魂。
この世界の天界で、何か色々とその辺りの説明されたけど、イマイチよく判らない。
これまで何度も生まれ変わって色々な生を受けて、その生涯の記憶が魂には残ってる、っていうけど。
知らないものは理解しようがない。

それでも。
した事すらないのに、先日みたいな高位の挨拶が出来るのは、その所為なのだと。

血や魂に刻まれたものは消え無いから、って。
新しい肉体(からだ)を造る時に魂の記憶と繋がり易くしたから、って。
そう云われると、そうなのかもな、ってのは思う。

けれど、その程度の理解しかない。
自分の意思で行使しているものの筈なのに、そうでないものが混じるのは妙な感覚だけどね。

疑問なんて、山ほどある。

何で、俺がこの世界に来させられたのか、とか。
何で、俺だけが特別扱いなのか、とか。

不安ではないけど、やっぱり不思議。
だって、天界に居る人間の魂って、俺ひとりだけだったんだもん。
天界はカミサマ達の世界だから、普通の魂は入れないとか説明された。

普通の魂は、天界のひとつ下に作られている空界と呼ばれる空間に居るんだって。
カミサマ達が新しい魂を作るのも空界。
地上世界の生き物の魂が死んだ後、戻って来るのも空界なんだそう。
だったら、俺も空界在住でないといけないんじゃないかな？　カミサマじゃないんだし。
その事を聞いたら「ムリ」「ダメ。リツキは空界立ち入り禁止」って言われた。
なにそれ、イジメ？　って拗ねたてたら「リツキは他の世界の魂だから出入りが無理なの」「普通の魂は元々空界が故郷。でも創世神様の愛ぐし子は天界が故郷になる、だから駄目なの」って。
挙句の果てには「別の世界の、特殊な魂だから、尚更なのよねー」とか……
もしかして俺の魂って変なの？　って聞いたら笑われた。
「変じゃなくって素敵なんですよ」「この世界でリツキと同じ能力を持っている者はいませんし」と、説明された。

このまま、ずっと天界で暮らしていてもいいとは言われたけれど、地上の世界も捨てきれなかった。
肉体持って人間として生きたい、って望んだ時も、「好きな風に生きていいよ」「応援するよ」って、そうカミサマ達から言われた。

ただ、地上世界で人間として生きるなら、どうしても理は外せない。
そう言われて、カミサマ達からの幾つかの約束と、お願い事を承諾したのは俺自身。
約束の方はともかく、お願いの方は……少しだけ戸惑った。

「それを行った後の事は、全く気にしなくていいから」
「リツキは、やりっぱなしで構わないから気楽にやってね」
「後は全部、自分達が面倒見るから心配しないで」って、そう言われた。
俺にお願いされる理由も聞いたし、理解もしている。
理解してる……けど。
何か、そのお願い事と約束事とを合わせて考えると、少しだけ厄介で。
下手すると特殊な立場であり能力のある俺を確保して、擁立しようとする輩が出てきそう。
それが、何より嫌。

俺自身が偉い立場に立つなんて、決して望んではいない。
人間同士のしがらみとか係りたくないし、何より、めんどくさい。
まさか王族とかと係る事になるんて、こういう状況は考えてなかったんだよなぁ……

「そろそろ、わたし達精霊だけでなく、人間（ヒト）を使役する事にも、お慣れ下さい」

俺の意見無視された上、さっくりと口頭で言い渡されてしまった。
ただの一般人として平和にのんびり暮らしたいんだけど、やっぱ難しいのかなぁ……

ともかくも、使用人に対しては慣れるしかない。
そう割り切って、まずは自分の身体の状態を自己判断する。

腕は何とか上げ下げできるが、持ち上げたままが出来ない。すぐ疲れる。
足はゆっくりだと曲げること位は出来るけど、まだ膝を立てる事すらできない。
筋力が減っている所為か、身体中あちこちの触感が鈍い。
血の流れも関係してるんだろうな……手足が冷たいし、全体的に寒い。
元々ゆっくりとした呼吸なんだけど、鼓動がいつもと違ってかなり早い。
急な動きだけじゃなく、会話さえ気を付けないと心臓が悲鳴を上げて苦しい。
身体全体の疲労が激しいのか、眠気もかなり強い。
俺やっぱり、今は結構厳しい容態なんだね。

造血剤とか強壮剤とか作りたいけど、せめて上半身がまともに動かせるようになるまで、もう少し我慢かな……
まずは血と肉を少しでも増やさないと。
スイが直接俺の体内に糖質補給してくれてたみたいだけど、空腹感もそこそこあるし、そろそろ経口食始めないと胃が小さくなるからなぁ。

「今日から、経口で食事したい。できる？」

「はい」

この離宮での俺の世話頭となる女性、ナイルにそう伝える。

「そういえば……俺の食事って、誰の担当なの？」

「王室厨房がその任を命じられていたかと存じます」

「……今日、明日は、水物しか無理……きちんと、伝えてくれる？」

「畏まりました」

ナイルはにっこりと笑みを浮かべた。

「ですので、まずはこちらの薬湯をお召し上がり下さい」

「中身、は？」

「主にクルルとティガナ。苦味を和らげる為にヌラを加えてあります」

クルルもティガナも、消化器官の活性剤だ。
ヌラは少し甘みと粘りのある植物で食材としても使われている。
医師見習いでもあるナイルは御殿医長の推薦だって。

ナイル・リラ・アーディン。
アーディン伯爵家の二女で二十二歳。
手入れの行き届いている肩より少し長い金髪は、きっちり首の辺りで一つに結わえられている。
新緑のような緑の瞳には、きらきらと自分に対する自信があふれているように見える。
落ち着いた物腰と対話で嫌味がなく気楽に喋れるのは有り難い。

上半身を起こして背もたれを作ってもらう。
まだ自分の手では震えて上手く持てないので、ナイルが差し出してくる器に口を付ける形になる。

「ほぼ五日も経口から何も入れられてないとの事ですので、ゆっくりと、舐めるように少しずつお飲みください。飲めるだけで結構ですから」

ナイルの言葉を聞きながら、ゆっくりと薬湯を嚥下してゆく。
水以外の、暫くぶりの刺激に胃が暴れる。

「……っ……」

器から口を外し、何度か呼吸を落ち着け、もう一度器に口を付ける。
数度嚥下して、ようやく胃が暴れなくなった。
絶食の後はこれが一番苦しい。胃の中身、殆ど何もないのにえずくとか苦行だよ。
吐かなくて助かった。
器にある分量の半分ほど飲むと、胃の方から「イラナイ」って訴えてくる。
それを無視してもう一口だけ飲み下した。
……うん。大丈夫、吐く気配無い。
でもそれで限界っぽいんで、器から口を離した。

「お下げして宜しいですか？」

少ししてナイルが声をかけてくる。
俺が頷くと口元を布で拭われた。

「ありがと」

「いえ……後ほど、御殿医長様が診察に来られる予定となっております。厨房への料理の指示は診察後になるかと思いますが……空腹感はどの程度でしょうか？」

「んー。我慢できるか、って事なら、あと数時間は、平気。空腹感はあるけど、どのみち多くは、入らない……量は、少しで」

「畏まりました」

器を片付けるナイル。
俺は傍に居るフウに言う。

「あの子らに、言伝。額(デコ)で頼む……」

「はい」

フウの額が俺の額に付けられる。
家へ戻るのは数か月はかかるだろうという事や、俺は大丈夫だから、あまり心配しない様に、って事。
あと、我儘言わずに、フィーとツッチーの言う事をよく聞く事。
そういった思念をフウへと伝え、額を離す。

「では、行って参ります」

「ん。宜しく」

消え去るフウ。
それと時を同じくして、御殿医長が助手を二人ほど伴って寝室へ入ってきた。
寝台の傍らに立ち、笑みを浮かべる御殿医長。

「私の事は、覚えておられますかな？」

「ええ。御殿医長でしたよね？」

「はい。王室御殿医長を務めております、ニール・ロウ・パルカウムと申します」

「リツキ、です。お世話になります」

「診察いたします、そのまま楽にされていて下され」

手順通りに触診や聴診が行われ、御殿医長はナイルを振り返り訊く。

「薬湯はどの程度飲まれた？」

「約半量ほどです。吐き戻しもございませんでした。後、リツキ様からのご要望で食事は水物と伺いました。厨房へ指示を出しても宜しいでしょうか？」

「うむ。油分を極力減らして、塩も少なめにする様にな」

「承知いたしました」

軽く礼を取るナイル。

御殿医長が再び俺の方を向く。

「御自身でもお判りの様ですが、まだ容体は決して良いとはいえません。くれぐれも無理をなさらぬ様になさって下さい。あと、何か御所望のものなどはありますかな？」

「……車椅子があれば、借りたい」

「まだ、数日は安静です。車椅子を許可できない理由はふたつ。ひとつは背を背もたれに預けているだけで、まだ御自身の力で真っ直ぐに座り続ける事が出来ない状態である事。もうひとつは移動時に生じる車椅子の振動に耐えられるだけの体力がまだない、という事です。経口からの食事が安定した後、身体状態の改善が見受けられれば、車椅子をお出ししましょう。ですが、何用ですか？」

「この、寝室以外の場所を、見てみたいんだけど」

「ふむ……では、この者達を使うといいでしょう。ギルディオ殿、レオーノ殿、こちらへ」

少し前に紹介を受けた俺専属の使用人が二人、寝台の傍らで俺に向かい跪座する。

簡易防具服と剣が、その動きに軽く金属音が鳴る。

二人とも王国騎士団の騎士っていってた。

一人はギルディオ・サン・ローエヌ。

ローエヌ子爵家の長男で二十五歳。

騎士でもあるけど次期ローエヌ家当主という事と、何か国に功績

があったからとかで準子爵位をもってるんだって。
背が高く、俺より頭二つ分はありそうな長身で、腰まである白髪が印象的。
顔立ちは少し厳(いか)ついが、その橙の眼は穏やかだ。
もっとも、戦いになると変わるのだろうが。

もう一人はレオーノ・シリカ・サンスリック。
サンスリック子爵家の長女で二十歳。
ローエヌ子爵家もサンスリック子爵家も武門の名家なんだそうで、男女関係なく鍛えられてるらしい。
彼女も俺より頭一つ分は背が高そう。
頭に巻くように編みこまれて纏めてある栗色の髪が活発さを印象付ける。
俺の瞳は空の青色だけど、彼女のは緑がかった青色。
きりっとしてるから、ギルディオと二人並んでも迫力負けしてないとか、凄いね。

御殿医長が俺に言う。

「移動は、彼等に抱えられてのみ許可します」

「仕方ないね」

「少しでも辛くなった場合は、すぐに寝台へ戻る。という事が条件です。あと、移動中止の判断は彼等ふたりに優先許可を与えます」

「……わかった」

現在の自分の身体状況では仕方ないとはいえ、きつめの行動制限に苦笑しか浮かばない。

御殿医長は跪座したままのギルディオとレオーノに言う。

「ギルディオ殿、レオーノ殿に、リツキ様の行動における制止権限を御殿医長の判断として認めるものとする」

「「承りました」」

「では、跪座を解いて所定の場にお戻りください。用法については後ほど詳しく説明いたします」

「「はい」」

見事なくらいハモる。

息が合うというより、やっぱ軍人さんだから日頃の訓練なのかな。

二人は寝室の扉近くでの立哨に戻った。

俺の護衛も任務の一つなんだって。

御殿医長が騎士二人に色々と説明を終え寝室を去った後、イヤな感覚がきた。

「スイ……」

「駄目ですよ。ちゃんと、人間(ヒト)に言われて下さい」

「ううう」

スイにそっけなく断られ、仕方なく相手の名を呼ぶ。

「サイナム、クーノ。どっちか手、空いてる？」

「「はい。何でございますか？」」

この二人も、何でかハモるな……

いやいや、そういう場合じゃなかった。

「ごめん、両方出てるみたい……処理、お願い」

「！　気づきませんでした。申し訳ございません」
「すぐに浄化いたします。少しだけ御辛抱下さいね」
サイナムが俺に掛けられている掛布をまくり取り、近くの籠へと置く。
クーノが肌着だけの俺の腹部を中心に術式を展開した。
「汚物限定、分解」
排泄物が分解され気体へと変わり、下半身に感じていた不快感が次第に消えてゆく。
「風の精霊に願う。室内の汚れを掃い、清らかなものへと変じさせたまえ」
サイナムの言葉に風が動く。
排泄物や臭気を含んでいた室内の空気が窓から外界へと流れ出て、かわりに新鮮な空気が室内を満たしていった。
すっきりはしたが、こればかりはもう……早く動けるようにならないと手を煩わすのが本当に申し訳ない。
「もう少し御辛抱下さいね。……失礼します」

クーノが俺の肌着と敷布に手を当て術式を展開した。

「汚物限定、吸収及び転移」

空中に淀んだような黒っぽい塊が現れ、先程の籠の中の掛布へと移動した。

「汚物は籠の中。外へ出る事あたわず」

籠の傍へ移動していたサイナムが、臭気等が漏れ出無い様、籠に術で蓋をし、新しい掛布を持って俺の方へと戻ってくる。

その間にクーノが肌着のずれを直してくれた。

「ありがと、すっきりした」

「いいえ。いつでも遠慮なく御呼びください」

クーノが笑顔で言う。

新しい掛布がサイナムの手によって再び身体に掛けられた。

「夜中でもどちらかが、御傍に常におります。ただ、もし、お寝み

の最中無意識に排泄なされた場合は私どもが勝手に処置をさせて頂く事になりますので、その事に関してはお許しを下さいませ」

「わかった。手間かけるけど、宜しく」

「不衛生な状態は病を悪化させます。どうか、お気になされませぬ様」

一礼をするサイナム。

サイナム・ティティル・シュケイル。
シュケイル家の次男で、二十一歳。
シュケイル家は代々神官を輩出している家系で、サイナムの兄も父も神官位を持っている。
父と兄は中級神官位。サイナムは精霊の加護があるので上級神官位。
短く刈られている髪は赤っぽい金髪で、灰色の瞳は光の加減で銀色にも見える。
殆ど同い年なのに背丈、俺より頭一つ分上とか……何か凹む。

クーノは汚れた掛布の入る籠を持ち寝室から出て行った。
腰よりも長い銀髪がきらきらと揺れ、扉の向こうへと消える。

クーノ・タリ・ハンカレット。

ハンカレット男爵家の三女で、十九歳。
幼い頃から精霊の加護があったそうで、現在では上級巫女位を持っている。
十九歳にしては幼く見え、大きな瞳は濃い紫。
少しだけ垂れ目なのが可愛い。

排泄後。
世話人だと言われた者達の動きをのんびりと見ていて、気づいたら転寝してた。
食事の用意が出来たと言われるまで意識なかったっての、自分でもびっくり。

目の前に汁物。
おいしそうな香り。
お腹がクレクレ騒ぐけど、ゆっくりゆっくり、ね。

いただきます。

9　話（後書き）

食事も排泄も健康の上でとても大事。

あと、車椅子って五百年以上前からあるんだって……凄いよねー

１０　話（前書き）

この作品には〔残酷描写〕〔１５歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現〕が含まれています。
１５歳未満の方はすぐに移動してください。

執筆日程や近況は活動報告にあります。

10話

おはようございます、リツキです。

昨日の、夕食のスープは美味しかったです。
流石に王宮の料理人さんたちだね、こちらの希望をきちんと理解してくれてて、薄味だけど出汁の良くきいた汁に、舌でも潰せるほど煮込まれた根野菜が沢山入ってた。
量は半人前くらい。
匙でゆっくりとゆっくりと。
吐き気もなく完食できました。うまうま。

そして、今朝も汁物です。
夕食とはまた違った味付けで、柔らかい豆類が少し入っていた。
あっさりしてるけど、とろみがあってとても食べやすい。

お昼か夕食には、ちょっとだけパン付けてもらおうかな。
浸したら食べられるかも。

薬湯飲んだ後、手や足を少しだけ動かす。
うん、昨日よりは少しマシに動く。良好良好。

フウは昨夜、あっちから返信付きで戻ってきていたけど。
その返信で現在再度伝書鳩中。
出がけに物凄く心配そうな顔されたけど、大丈夫だって、スイも居るし。
俺の周り、心配性が多くて困ります。

括約筋……もう少し頑張ってくれよ。
願い空しく排泄による浄化処理を受けつつ、俺はそんなことを考えてた。
感覚は大分戻ってきたから、括約筋達さえ耐えてくれれば、きちんと他で排泄できるのに。
あ、そうだった。それもあったんだよね。場所場所。

「ギルディオ」

俺の声に、扉の横で静かに立っていたギルディオがこちらへと来る。

「何でしょうか、リツキ様」

「うん、ちょっと散歩したい」

「少しお待ちください。……ナイル殿、宜しいか？」

「先程診た御様子では大丈夫かと。ただし長時間は許可できません」

「了解した。様子を見てこちらの判断で切り上げる。……それで宜しいですか、リツキ様」

「うん」

クーノが薄くて長いクッションみたいな物を用意し、まずその上に横にされてそのままクッションごとギルディオに抱き上げられる。簡易とはいえ防具服や籠手は硬い。

それらに直接身体が当たる事で、痛みや疲労を軽減させる為だと説明を受けた。

「うわー……こんなだったのかー」

ギルディオに抱えられ、まず見えたものは寝室全体。

上半身起こす程度じゃ全部は判らないからね。

広いわー、さすが賓客用。

寝室と居室が混在してる造りだからか、ほんとに広く感じる。

寝室を一通り眺め、ベランダを覗き、隣の部屋にお手洗いがある事を確認した。

浴室はまた別の部屋で、やっぱり少し大きめ。

反対側の部屋は使用人の待機部屋。
廊下に出た時、扉の外にも護衛の立哨が居たのには少しびっくりした。
ご苦労様、って声かけたら固まってた。……なんで？

応接室も別にあり、食堂も別にあったけど、食事は主人の希望でどの部屋で摂ってもいいんだって。
使用人の居住区や厨房とかの案内は後日にしてもらう事にした。
身近な部分から覚えていかないと混乱しそう。

「お加減は、大丈夫ですか？」

護衛として同行しているレオーノが問いかけてくる。

「うん。大丈夫……あ、外、庭園になってるんだ綺麗ー」

屋根のある通路の壁の一部が大きな窓としてくりぬかれている。
庭園を見ていると、木々や花々の間にひょこひょこと可愛い姿が見え隠れしていた。
相手もこちらに気付いたのか、あ、って表情でこちらへと飛んでくる。

「リツキ様だー」

「リツキサマー」
「こんにちはー」

周囲が賑やかになる。
俺は笑みを浮かべて口を開く。

「こんにちは。君たちがこの庭園の護り？」
「そうなのー」
「頑張ってるのー」
「きれいきれい、なってる？」
「うん。とっても綺麗だよ、頑張ってるね」
「ほめられたー」
「うれしー」
「もっとがんばるー」

きゃらきゃらと俺の周囲を飛び回っているのは木々や花の精霊たちである。
まだ若いのだろう、喋りがつたなくて可愛い。

「リツキ様？」

怪訝な顔でレオーノが声をかけてくる。
あはは。

「ごめん。精霊たちが挨拶に来てて……」

苦笑してそう言うと、レオーノは目を丸くしていた。
そりゃ驚くよね、精霊語で会話してたんだから。
習っている者ならともかく、普通の人間にはぴるぴる言ってるようにしか聞こえないだろう。

精霊は人間の言葉は理解できるが、中級精霊辺りにならないと人間の言葉が上手く喋れないので、意思の疎通が難しい。
さっきは、つい相手に合わせてしまって精霊語になってたので、今度はちゃんと人間の言葉で言う。

「はいはい、君たちもお仕事に戻ってね」

「「はーい」」

「はーい……あれ？　リツキさまー、あれ、あれ」

「ん？」

一体の精霊が指さす先はギルディオの頭。
その方へ視線を向けると、そこにもう一体精霊が居た。
物凄い剣幕でギルディオの髪を引っ張っている。

通りすがりの精霊なんかがよくやる悪戯の一つかとも思ったけど、なんか凄く真剣で一生懸命に見えた。
何より目の前の俺に気付いていないっぽい。
精霊王の御印を受けているという関係上、彼ら精霊が俺に気付かないというのはまずありえない。

「どうしたの？　ギルディオに用事？」

強く意思を乗せ言うと、その精霊が俺にようやく気付いたのか、近づいてきた。

「りつきさま！　りつきさま！　たいへんなの！」

「なにが？」

「あのね、あのね！　どーんって！　いたいの！　はじけちゃうの！　やなのーーー！」

「ああ……もう。落ち着いて、ここきて、直接伝えて？」

俺は自分の額を指で示した。
精霊が近寄って俺の額に自分の額をぴたりと付ける。

感情と一緒に映像が飛び込んできた。
……確かに、これはヤバイ。
精霊が記憶を寄越し終え、俺から離れる。

「大丈夫。心配ないから」

俺の言葉にほっとした表情をする精霊。
でも、早くしないと危ない。
俺はレオーノのマントを掴んだ。

「レオーノ。ギルディオと変わって」

「え？」

「交代して俺を持って。早く」

「は、はい！」

ギルディオが眉を寄せながらも、俺をレオーノへと抱きかかえさせる。

「スイ！」

「御前に、あるじ様」

多分、姿を消して付いて来ているだろうスイを呼ぶと、すぐ傍に顕現した。

「この子を道案内にして、ギルディオと転移して」

「何事ですか？」

「行けば判る。行って、助けろ」

スイに命じた直後、ギルディオが叫ぶ。

「ちょ……お待ちください！　何事なのですか？　職務中ですので、私はここを離れるわけには」

「そういう事、言ってる場合じゃないから」

「いえ、ですが！」

「俺が命じたとでも何でも、後でなんとでもいえるから」

「駄目です！」

騎士とか生真面目なの多いってホントなんだね。
もう無理やりスイに引っ張ってってもらおうとか思ってたら、後方から声が掛けられた。

「何の騒ぎだ？」

「殿下！」

現れたのは護衛を連れた皇太子だった。
助かった。

「ああ、丁度良かった。皇太子から命じてあげてくれませんか？」

「何を、ですか？」

「緊急事態なんです。ギルディオに、今すぐ、家に帰れ、と」

「……許可しよう。ギルディオ・サン・ローエヌ、これより帰宅を命じる」

「な……はい」

皇太子の命令には流石に逆らえず、あっさり返答が返ってきた。
俺はスイに言う。

「絶対に、欠けさせないで、スイ」

「お任せくださいませ、あるじ様」

言葉短く、スイは精霊、ギルディアと共にその場から消え失せた。

深く息をはく俺に、皇太子から声がかかる。

「少しお疲れの御様子に見えますが、大丈夫ですか？」

「そう、ですね。今日はここまでにしよう」

レオーノを見上げると頷きが返された。

「寝室へ戻ります」

背もたれを付けた状態の寝台へと移され、身体の力を抜く。
皇太子は寝台の傍で椅子に座っている。
ゆっくりでの移動とはいえ、やっぱり少し疲れた。
おまけに精霊と直接交信とか、ちょっとまだ早かったかな。少し頭重いや。
でも、言う事は言っとかないと。

「突然の申し出に、許可を戴き、有り難うございます」

こくりと皇太子へ頭を下げる。
ギルディオが何を言おうと転移させるつもりだったけど、本人納得の上での移動が好ましいというのは当然のことだ。
皇太子は真面目な顔で返してきた。

「緊急事態だというリツキ殿の言葉を受けただけです。何があったのかお話し戴かないと、命を下した私も困る事なのですが」

凄いな。
俺を信じてくれてるから、咄嗟であの判断したんだ。
でも、まずは最初から……かな。

「……言葉を交わすのは初めて、ですね。リツキ、と言います」

「エルケ・フィリリァド・セル・ラクスだ」

皇太子は名を告げ、ゆっくりと頭を下げた。

「まずは、私の命を救ってくれた事に感謝する」

「成り行きだと、お父上にも言いましたが？」

「それでも、だ」

真剣な表情で俺を見る。

「リツキ殿が居なければ、命を失うか重篤な状態だったかのどちらかだ。救われた命を大切に使う事に躊躇はないが、見も知らぬ相手に対して行われたその行動に敬服申し上げる」

「助けられると、そう思ったからです。善美にとられても、困ります」

「……普通では、滅多に巡り合えぬものだからな」

「王族も色々と、厳しい世界なんですね」

苦笑しつつ答えると、皇太子の顔にも笑みが浮かんだ。

「厳しい、か。そういう言い方もあるんだな」

「どの業界でもそうでしょう？　王族がそれに漏れ出るとは思いませんから」

「……本当に面白いな、リツキ殿は。……で。先程の騒動はどういうものなのか？」

元の質問へと戻り、俺はにっこりと笑みを浮かべた。

ギルディオの方はスイが付いてるから、きっと大丈夫。問題ない。

「後で、ギルディオから報告があると思いますよ」

「？」

「俺の口から伝えるより、当事者の方がいいでしょう？……朗報なら、尚更、ね」

「……朗報なのか。なら、いい」

ほっとした顔になる皇太子。

無理もない。

緊急事態だと言って、ギルディオに無理矢理命じてもらったのだから。

「皇太子は、どうしてこちらへ？」

「リツキ殿の見舞いに来ただけだ。他意はない」

……いや、他意がないって事はあり得ないでしょ？　笑顔だけどさ。

皇太子も色々苦労してるのかもね。

ん。じゃ、こっちから話振るか。

「皇太子は、兄弟とか居るの？」

「……ええ。居ります」

まさか知らないのか？　っていう目、しないでー。

あんまり深く国とか社会とかに係わる気なかったから、ほんとに知らないんだって。

「聖魔の寝床育ちだから、そういうの、よく知らなくてね」

苦笑する俺に、皇太子は少し笑みを浮かべた。

「現国王陛下である父上と母上。あと姉弟妹（きょうだい）が居ます」

「きょうだいが居るんだ」

「ええ。姉が一人、弟が二人と妹が一人居ます」

「四人も居るの？　それは賑やかだね」

「先日から皆、リツキ殿に会わせろと煩いですよ。昨夜も王妃……母上までもがお会いしたいと言われる始末で」

苦笑する皇太子。

仲のよさそうな家族関係を感じて、俺もつい笑顔になってしまう。

「家族みんなが元気なのは、いい事だね」

「リツキ殿の御家族はどちらに？」

「……いないよ」

笑顔のまま、言う。

「俺一人っ子だし、六歳の時、両親とも魔獣に食い殺されちゃったから」

「な……申し訳ない、悪い事を聞いた」

「いや、いいよ。近いうち誰かが俺の素性を聞きただしに来るだろうって思ってたし」

皇太子が本当に申し訳なさそうな表情をするので、どうしても苦笑に近い笑みになる。

国賓としてこの場に居るからには、そのうち表へ出ないとならなくなるだろう。

その時になって、俺の素性を全く知らないという訳にはいかないだろうから。

だから。

この地上世界に降りる時、創世神から決められたリツキという人間の過去を語る。

記憶の中に映像込みで刷り込まれた過去。

本当にこういう人生が自分にあったんじゃないかと錯覚する程のリアルな記憶。

それを語った。

どこで生まれたのか、とか、両親の名前とかは覚えていないし、知らないという事。

最初の記憶は樹海だったから、多分そこで生まれ育ったんだという事。

両親も薬師のようだった事。

六歳の時。修行をしておいでと言われ、両親の知り合いに預けられる予定だった事。

相手との待ち合わせの場所へと向かっていた時に魔獣に出くわした事。
いきなり突き飛ばされて、顔を上げた時にはもう両親とも頭と胴体が離れていた事。
死なずに済んだのは、魔獣の気配を察知した待ち合わせの相手が来て魔獣を倒してくれたからだという事。
待ち合わせの相手というのが、どうやら両親の師匠にあたる薬師であったという事。
それから一人前になるまで師匠に鍛えられた事。

ゆっくりと、皇太子にそれらを語った。

「その助けてくれた相手が師匠。後で聞いたけど、両親もその師匠の元で学んでたんだって。で、それからは樹海の師匠の家で薬師の修行三昧。厳しかったよー、もう寝るのが、一番の楽しみだ、ってくらいに。で、十三歳の時に、独り立ちしてヨシ！　って師匠の家、追い出されちゃったんだけど。ひと月くらいして尋ねたら、家ごと、無くなってたし。師匠も、結局最後まで、名前とか、教えてくれなかったんだよね。世捨て人、だったのかなぁ？　あの人」

最後は本当に苦笑しながら話を締めくくった。
語ったのは創世神から決められた表設定の人生。
キリがいいので十三歳辺りで話を切ったが、俺がこの地上世界に降りた十七、八歳までの人生はきっちりと脳内に刷り込まれている。
後は不都合の無い様にその後の三年間と組み合わせるだけだ。

実は俺の人生には裏設定まであって、これは他の人間に知られるのはちょっとヤバイから、今は俺の口からは語れない様になってたりもする。

沢山話をしたせいか、少し疲れた。
頭が重いのが強くなってる。
まぶたが勝手に落ちてくるのを手で押しとどめ、皇太子に言う。

「済み、ません……少し、休みます……」

「……構いません……ゆっくり御休みになって下さい」

皇太子の声を聴きながら意識が落ちてゆく。

何で、何もしていないのに、こんなに息苦しいんだろう……

１０　話（後書き）

内緒とか秘密がてんこ盛りなので、リツキ気苦労中。

１１　話　　騎士ギルディオ（前書き）

この作品には〔残酷描写〕〔１５歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現〕が含まれています。
１５歳未満の方はすぐに移動してください。

11　話　　騎士ギルディオ

「ギルディオ・サン・ローエヌ。皇太子直属第二親衛隊副団長の任を一時解き、本日これより国賓であるリツキ殿の専属護衛を命じる」

「御意」

エルケ殿下からの命令で、私は国賓となったリツキ様という少年の護衛をする事となった。

あの、樹海での行幸。視察と狩り。

私は護衛の一人として殿下の傍らに居た。

あの時。

妙な気配を感じ、ほんの数秒、殿下から視線を外した。
わずかなその間に殿下が術式で転移されてしまうなど、あってはならぬ失態を犯した。

犯人である術者はすぐに捕縛したが、殿下がどこへ転送されたのかをなかなか吐かなかった。
だが樹海の奥の木々から、鳥たちが慌てて空へ向かい飛び去って行くのを確認した事で、方角だけは辛うじて判明。すぐにその方角へと向かう。

樹海を進んでゆくと大きな炸裂音がした。
遠くに微かに煙も見える。
その場で何かが行われているのは確かなようだった。

急ぎ現場へと駆けつけると、槍を持った男が今まさに殿下を襲おうとしていた。
他の者に捕縛を命じ、私は殿下の元へと駆け寄る。
大した怪我はしていない様子にほっとしたと同時に、真剣な殿下の視線の先を見る。
立ち上がりよろけそうになる殿下を支え、ともに移動した。

倒れている者を一目見て、これはもう駄目だろう、と思った。
流れ出ている鮮血の量がかなり多い。
いくら術式で補正しても、これでは体力の方がもつまい。
苦しそうにあえぐ姿に、すぐに楽にしてやったほうが良いのではないかと、殿下に陳述したくなった程だ。

けれど殿下は諦めてはおられず、城への移送を求めた。

城への移送に私は加えられず、捕縛した者達の連行と取り調べ官への引き渡しを任された。

任務遂行直後、先に城へ殿下と戻られていた親衛隊団長より自宅での謹慎を申しつけられる。

どの様な理由であれ、あの時私が殿下を御守り出来なかった事は事実。

恐らく謹慎は一時的なもので、会議の後、降格か親衛隊からの任を解かれる事になるだろう。

至極当然の事に異論など考えもしなかった。

だが、私に下された命は違った。

親衛隊副団長の任は一時解かれただけで、国賓が居城している間だけの護衛だという。

その後の事はまだ決められていないという説明に、これはもしかすると今回の失態における信頼を取り戻せるのかもしれないという期待が湧き、天の采配に感謝した。

が、その思いが浅はかだったと、すぐに思い知らされる事となった。

あの倒れていた少年が殿下の御命を救った者であり、護衛対象の国賓である事を知った。
殿下の御命を救ってくれた事に対する恩義は私とて口で表せない程に持っている。
だが心の中でとはいえ、私はあの時、彼の少年の生命を終わらせようとさえ考えていたのだ。
状況はどうあれ、殺意を持った事は確か。
そのような自分が、その少年の護衛に相応しいとは思えなかった。

であれば、この少年の護衛として選考され命じられた事そのものが罰なのだと。
私の処断を精霊長様方が決めて下さるのだろうと、そう考えていた。

護衛の最終選考において精霊長様方からの質疑は簡素ではあったが、眼光の奥にはかなり強く冷徹さを感じた。
尤もだと、素直にその視線は理解できた。
主を護るための存在であるのならば、主を害するものに容赦などないだろう。
素直に死を覚悟したが、精霊長様方は何故か私を傍仕えの護衛として認めて下さった。
理由は解からない。
が、任命されたからには心より御仕えしようと、そう思った。

そして、対外的には四大精霊長様全ての加護を受けている事としているが、本当は精霊王様自らが隷属の御印を授けていて、四大精霊長様は精霊王様からこの少年の守護を命じられているのだという、信じられない事実をも知った。
うっかり口を滑らせられるような内容ではないのだ。
それらの事実を口外出来ぬ様枷を付けられたが、至極もっともな処置であると自らも望んだ。

実際にお会いしたのは風の精霊長様と水の精霊長様だけだが、この御二柱だけでも重圧な神力を感じるのに、この少年は四柱すべての精霊長様だけでなく、その上位の精霊王様まで使役できるというのだ。
精霊王様がどのような思慮でこの少年に隷属の御印を授けられたのか、愚人たる私には皆目見当もつかないが、御印を授かる者達は皆、やらねばならぬ役割を持つのだと聞き及んでいる。
しかも四大精霊長様を守護に遣わせる程の役割とは、この少年はどれ程の責を背負っているのだろうかと不安になる。

が、それでも。
殿下や精霊長様方の期待に応えるべく、一騎士としてこの任を全うしようと改めて己に誓った。

精霊長様方に連れられ、他の傍仕え達と共に寝室でこの離宮の主となる方と顔合わせをされた。
寝台の上で横たわる少年……リツキ様の顔は蒼白く、生気が欠けている。
聞けば、前日心臓が止まりかけたとかで、疲労からか未だ目覚めていないのだと。
身体の状態などは、御殿医師長からも色々と注意事項を説明された。

目覚められたリツキ様に、ようやく傍仕え全員が紹介され、挨拶を許された。
リツキ様は穏やかな笑みで皆を受け入れて下さった様子である。
クーノ殿によって梳られている真っ直ぐな癖のない髪は天の大君の色。
サイナム殿の動きを追っているその瞳は、空のような青。

寝台の上に居る為、予想した背丈や身体つき、その顔立ちをざっと見る限り、リツキ様はまだ少年の域を出ていない様に見える。十四、五くらいであろうか。

他人と触れ合う事が少なく、人に対してあまり慣れていないと説明は受けていたが、精霊長様方に対してはあれほど饒舌なリツキ様の口が、私達に対してはいつも重い。

戸惑うように声をかけてくるその仕草は、まるで弟の幼い頃のようで、つい目が細まってしまう。

そして今日、リツキ様から初めて名指しで呼ばれた。

「ギルディオ」

扉の横で立哨をしていた私はすぐに寝台の側へと向かう。

「何でしょうか、リツキ様」

「うん、ちょっと散歩したい」

少し恥ずかしそうに告げられた言葉に笑みが浮かぶ。
自分で動いてはならない。動きたい時は私かレオーノ殿の手を借りるようにとの、昨日の御殿医長殿との約束をきちんと御守りになるらしい。
だが、移動できる状態かどうか、確認だけはしておかねばならない。

「少しお待ちください。……ナイル殿、宜しいか？」

「先程診た御様子では大丈夫かと。ただし長時間は許可できません」

診断では幸いにも移動が可能らしい。
リツキ様を落胆させずに済み、私も安堵する。

「了解した。様子を見てこちらの判断で切り上げる。……それで宜しいですか、リツキ様」

「うん」

楽しそうな返答が寄越され、すぐに移動の準備が整えられた。
私がリツキ様を抱えて移動する間は、同じ騎士のレオーノ殿が護

衛として同行するという分担を既にしておいたので、レオーノ殿も気を引き締めている様子だ。

クーノ殿が薄くて長いクッションみたいな物を用意し寝台へと置き、リツキ様の身体をその上へと移動させる。

「騎士様方の防具服や籠手は硬くて、直接ではリツキ様の御身体に負担になります。痛みや疲労を軽減させる為、この上にリツキ様をお乗せして、そのまま抱えて頂きます」

尤もだと頷き、言われた通りにクッションごとリツキ様を抱え上げた。

「！……」

一瞬、落としてしまうかと動揺した。

改めてきちんと左腕にリツキ様の背の位置を正し、しっかりと抱きかかえる。

軽かったのだ。

末の妹よりも軽いのではなかろうか。

クッション越しからも判るほどの肉の無さ……予想していたより遥かに軽いリツキ様を抱えつつ胸を痛める。

大量に出血した状態での傷や毒の治癒術式の使用で、術式を行使する代償として身体中の筋肉がそれに置換され目減りしただけでなく、その時の毒が心臓を動かす機能を半分壊したのだと。
まだ決して安堵できる容体ではないのだと、御殿医長殿から、そう聞いてはいた。

刺客によって行われた最初の仕掛けである殿下の転移。
それさえ防げていれば、殿下の身が危険にさらされる事も、この年若い少年が瀕死の傷を負う事もなかったのだ。
けれど、起こってしまった事実を覆すことは出来ない。
出来るのは叶う限りの償いだけだ。

「言葉でも指さしでも構いません。指示をお願いいたします」

こくり、と。頷きがあった。
寝台を背にする様に向きを変えた。
その瞬間。

「うわー……こんなだったのかー」

リツキ様の口から言葉が零れ落ちる。

昨日、移動の許可を御殿医長に求めたリツキ様に対しては、無茶

な事を言う方だと、瞬間感じた。
けれど、御殿医長はそれに制限付きでも許可を出した。
その意を今考えてみれば、確かに心の安寧には必要ではないかと、そう考える。

意識の無いまま何度も居場所が変わり、しかも寝ている状態のまま身動きもとれない。
自分の居る場所がどのようなものなのかを知らないというのは、確かに不安でしかないだろう。
身体に不調が診られればすぐに止めるしかないが、僅かでも身の回りの環境を知ることで心の安心を増やしていってもらえればと思う。

一通り寝室を見渡し、ベランダを覗いた後、隣の部屋の手洗い場へと向かった。
次は浴室と使用人の待機部屋。
どの部屋も興味深そうにあちこち見ている。
次は寝室とは繋がっていないので一度廊下へと出る事になる。
気を引き締めて開けられた扉から廊下へと出る。
主人の居る部屋外に立哨の護衛が居るのは当然なのだが、リツキ様はその事を御存じなかったらしい。
抱えている腕にリツキ様の身体の震えを感じ、立哨兵に退け、という視線を送る。
素直にその指示に従った立哨兵だったが、次の瞬間に固まってしまった。

「ご苦労様」

リツキ様からのたった一言。
労いの言葉。
王侯貴族階級に及ばず、上流階級に属する者達は、使用人を人間と思っていない者も多い。
見ればこの立哨兵は若い。
これまでどの様な場所でどの様な役目についていたのかは知らないが、リツキ様からかけられた言葉に俯き固まっている状態から察するに、恐らく初めての労いなのだろう。
リツキ様はお優しい方なのだと、そう感じた。

向かいにある応接室や食堂を案内し、説明を加える。

「王陛下やお客様との会食などは、こちらの食堂で行われる事が多いです。ですが、基本的にお食事の場所は離宮の主様がお決めになってよい事になっておりますので、お断りになれない場合を除き、寝室で摂られてもベランダで摂られても構わないんですよ」

「それは、助かる」

にこりと笑うリツキ様に問う。

「使用人の居住区や厨房などの案内は、如何しましょうか？」

「……混乱しそう……だから、明日にするよ」

あっさりと答えが返ってきた。
呼吸はゆっくりだが、まだ辛そうではない。
ただ顔色の悪さは隠しようがなかった。
同じ様に気づいたレオーノ殿もリツキ様に声をかける。

「お加減は、大丈夫ですか？」

リツキ様はにこりと笑い、視線を他へと向けた。

「うん。大丈夫……あ、外、庭園になってるんだ綺麗ー」

今いる場所は屋根のある通路で、壁の一部が大きな窓としてくりぬかれ、外にある庭園の木々や花を楽しむ事が出来るようになっている。

と、リツキ様の口元から変わった音がこぼれ出た。

ぴるる、ぴぴぴ、ぴるるるる、ぴ

「？」

宙を見、繰り返されるその音をさすがに怪訝に思ったのか、レオーノ殿が先に口を開いた。

「リツキ様？」

声をかけられたリツキ様は苦笑しながら言う。

「ごめん。精霊たちが挨拶に来てて……」

レオーノ殿の瞳が真ん丸になっている。
珍しいものを見たと同時に、リツキ様の特殊な力を目の当たりにした事で私も驚いていた。
あれが、精霊語というものなのか。
精霊語はその発声からして、習得が難しいものなのだと聞いていたが、リツキ様だから出来る事なのだろうと、いとも容易くその言葉を紡いでいた事を呆然と納得するしかなかった。

私には精霊の姿など見えはしないが、そこに確かにいるのだろう。
リツキ様が宙に向かい、人の言葉で再び声をかけている。

「はいはい、君たちもお仕事に戻ってね……ん？」

突然、リツキ様の視線が私へと向けられる。
目線より上という事は私の髪とか、その上に何か居るのだろうか？

「どうしたの？　ギルディオに用事？」

リツキ様の視線が頭から移動し、中空で止まる。

「なにが？……ああ……もう。落ち着いて、ここきて、直接伝えて？」

リツキ様の指が御自分の額を示し、目を閉じる。
一瞬だけ、そこが光ったように感じた。

「大丈夫。心配ないから」

目を開けたリツキ様は一言そう言い、真剣な顔で眉を寄せ、いきなり傍に居たレオーノ殿のマントを掴んだ。

「レオーノ。ギルディオと変わって」

「え？」

「交代して俺を持って。早く」

「は、はい！」

レオーノ殿が動揺して視線を私に向ける。
私とて事情がさっぱり理解できないのだが、リツキ様の希望であるならと、リツキ様を丁寧にレオーノ殿へと抱きかかえさせた。
その直後。

「スイ！」

「御前に、あるじ様」

リツキ様の声に、いきなり傍に水の精霊長様が現出した。

「この子を道案内にして、ギルディオと転移して」

「何事ですか？」

「行けば判る。行って、助けろ」

中空を指し示し、水の精霊長様にそう命じたリツキ様に言う。
訳が判らない。
私の職務はリツキ様を御護りする事であるというのに、何故突然、水の精霊長様と共に移動しなくてはならないんだ？

「ちょ……お待ちください！　何事なのですか？　職務中ですので、私はここを離れるわけには」

「そういう事、言ってる場合じゃないから」
「いえ、ですが！」
「俺が命じたとでも何でも、後でなんとでもいえるから」
「駄目です！」

リツキ様はその意思を譲るつもりはないらしく、押し問答に発展してしまったその時、後方から声が掛けられた。

「何の騒ぎだ？」
「殿下！」

現れたのは護衛を連れたエルケ殿下だった。
助かった、殿下にも口添えをしてもらおうと、そう思った矢先。
リツキ様が私より先に口を開いた。

「ああ、丁度良かった。皇太子から命じてあげてくれませんか？」
「何を、ですか？」
「緊急事態なんです。ギルディオに、今すぐ、家に帰れ、と」
「……許可しよう。ギルディオ・サン・ローエヌ、これより帰

宅を命じる」

「な……はい」

緊急事態だというリツキ様の言葉に、殿下から直接帰宅を命じられてしまった。

命じられれば従うしかないが……

しかも緊急事態？　我が家？　何なのだ、それは。

「絶対に、欠けさせないで、スイ」

「お任せくださいませ、あるじ様」

リツキ様の言葉が短くそう告げられ、水の精霊長様が返答した直後。

私の視界から、殿下もリツキ様も消え失せた。

いや、違う。

水の精霊長様の御力で転移させられたのだ。

今、目の前にあるのは離宮の風景ではなく、紛う事なき我が家の一角。

そして、緊急事態の意味をも知った。

「イリーゼ？」

その場は私の屋敷にある客間のひとつ。
そして、そこに倒れ伏しているのは、私の妻、イリーゼであった。
意識がないのか、呼びかけても返事がない。

「イリーゼ！」

「騎士ギルディオ。まずは主治医を呼びなさい」

叫ぶ私に、水の精霊長様が静かに告げる。

「彼女は良い場所で倒れられた。寝台もある」

イリーゼの身体が浮き、寝台へそっと置かれる。

「彼女の身を案じるなら、急ぎなさい」

「はい！」

私は客間から飛び出し、主治医へ連絡を取る様、使用人に命じた。
主治医の家は近い。
ものの数分で駆けつけてくれた主治医や助手達と共に、私は再び

客間へと向かった。
こちらを見る気配もなく、水の精霊長様は口を開く。
「先程、破水しました。彼女の意識は戻っています。騎士はこちらで彼女の手を握り、声をかけなさい。医師はわたくしの補助を……湯と布の用意も早めに」
「！……まだ産み月まで、ひと月はあります！」
「心配はありません。……用意を早く」
水の精霊長様に命じられた主治医が私に呟く。
「……旦那様……あの……」
「説明は後でする。今はこの御方に従ってくれ」
「……判りました」
主治医は使用人に命じ、次々と必要なものを室内へと運び入れ始める。
私はイリーゼの手をしっかりと握り声をかけ続ける。
「私が傍に居る。しっかりしろ」

「……あな、た……」

イリーゼの微笑みが再び苦痛にゆがめられ、私の手が強く握り返される。

そんな中、水の精霊長様の優しい声が聞こえた。

「中でそのように暴れていると、出る事が難しくなりますよ」

水の精霊長様は、そっとイリーゼの腹の上に手をかざす。

「それは、わたくしが決めてあげますから、ただ、出る事だけを考えてなさい。力を抜いて……そう。あなた。そのまま、ゆっくりと横に回って、そう、上手ね」

その言葉に、主治医が近寄り様子を見つつ、イリーゼの耳元で口を開いた。

「奥様！　ゆっくりと息を吐いて、しっかり吸って。……いきんでください！」

「……っ！」

「もう一回！」

「……っつ！！」

「よし！」

主治医は素早く、けれど丁寧に赤子の鼻や口の膜を取り除いた。

「ん……ぎゃぁ！　ふぎゃぁぁ！！」

「よしよし。元気だ」

手早く処置をし、産湯に浸けるよう傍らの助手に手渡した。

私の視線は赤子からイリーゼへと向かう。

元気な子の出産に、さぞかし安堵しているだろうと思っていた予想が裏切られる。

「イリーゼ？」

「……っく……」

再び握りこまれる手。

水の精霊長様の声が再び聞こえてきた。

「次はあなたよ。力を入れちゃダメ。そう、苦しいけど少しだけ我慢して。大丈夫だから、ゆっくりと回って……」

再び主治医が近寄り、イリーゼの耳元で声を上げる。
何度目かのいきみの後、主治医が生まれた赤子を見て眉をしかめた。

「心配ありません。無理せず確実に外してあげて」

水の精霊長様の言葉に主治医が従う。
どうやら、へその緒が赤子の首に巻きついていたらしい。

ゆっくりとへその緒を外し、鼻や口の膜を外し終えた主治医の顔が曇る。
泣かないのだ。
逆さにして尻を叩いているが、それでも泣かない。
主治医の顔に焦りが見えた。
が。

「大丈夫。抱いていて……」

水の精霊長様は、抱かれた赤子の胸にそっと指を当てた。

「せっかちさんね。呼吸は、出てからするものですよ」

ふいっと、水の精霊長様の指先に水球が現れ、弾け消えた。
途端。

「ふぅ……んぎゃあ！　んぎゃぁああ！！」

賑やかな産声がその場に響き渡った。
こちらの赤子も処置の後、産湯へと運ばれてゆく。

イリーゼが目を潤ませながら私を見上げている。
私はまだ握ったままのイリーゼの手に口づけ、もう片方の手でイリーゼの顔にかかる髪を払いのけた。

「よく、頑張った」

「あなた……ギルディオ……」

「双子だと、何故教えてくれなかった」

「心配、かけたくなくて……ごめんなさい」

「……無事で、よかった……」

安堵した私の傍に、主治医と助手が赤子を連れてやってきた。
イリーゼの左右の脇に、産着にくるまれた赤子を抱かせる。

「奥様の右手の子が最初の御子で男の子。左手の御子は女の子です。危ない出産ではありましたが、よく頑張りなさった」

赤子達をきゅっと抱きしめるイリーゼを見て幸せを感じた後、私は、はっと我に返った。
一度立ち上がり、寝台の反対側に立っている水の精霊長様に向かい跪座を成す。

「水の精霊長様の御助力がなければ、妻も子も危ない所でございました。厚く厚く御礼申し上げます」

私の言葉で、ようやくこの場の人間がその存在をあらためて知り、畏れからか、皆平伏してしまった。
何と、イリーゼまで動こうとしていた。
だがそれを止めたのは、他ならぬ水の精霊長様だった。

「あなたはまだ、静かに身体を休めないといけませんよ。赤子の為にも、ね」

「は、はい！……有り難うございます」

そう言い、水の精霊長様は赤子達の額とイリーゼの額に軽く口づけをする。

「この屋敷を守る精霊達は、ここに住む者たちを大切に思っています。伝えられる力など殆どないのに、それでも。守護する場を離れてまで、この家の主の元へ緊急の事態を伝えようとしていたのですから……精霊達に愛されている家人と、その新しき住人に、祝福を」

告げられた言葉に、先程三人が口づけを受けた額が淡く光る。
水の精霊長様は微笑み、イリーゼに言う。

「今後数年、あなたと赤子達に病悪は近寄れません。健やかに育てなさい」

「あ……有難う御座います。有難う御座います！」

突然の僥倖にイリーゼは涙を流しながら礼を言っている。
水の精霊長様の視線が、私の方へ向けられた。
先程までの笑みなど全くない、氷の様な眼差しだった。

「礼は、わたくしにではなく、あるじ様へ。わたくしは、一人も欠けることなく助けろという、あるじ様の主命に従っただけですから」

「！」

ようやく、頭の中でリツキ様の一連の言葉が繋がった。

行って、助けろ。

まだ共に過ごして僅かに二日だが、リツキ様の口から命令口調を聞くのは、これが初めてだったことに気付いた。
精霊長様方へだけでなく、私達使用人に対してさえ「お願い」や「頼み」の言葉しか使われなかった。
そんなリツキ様が命じた言葉。

そして。
一人も欠けることなく助けろ。
それが受け取った主命なのだとしたら。

水の精霊長様を再び見れば、その表情は憂いに満ちていた。

当たり前だ！　私は何を呆けていた！
子の生誕の場に、私自身を間に合わせるという意味もあったのだと。
［家族］を欠けさせるなという主命に、私自身が含まれているという事に、何故気づかなかった！

あの時、すでに顔色の悪かったリツキ様。
その顔色を、容体を、水の精霊長様も見ているという事に、何故気がつかなかった！

私は主治医に聞く。

「後はそなた達だけでも、大丈夫だな？」

「はい。御安心下され」

「では任せる。……イリーゼ、子供たちを頼む」

「はい、あなた」

私は水の精霊長様へ告げた。

「職務に戻ります。御一緒に連れ帰って下さいませ！」

「よいのですか？」

「家族の無事は水の精霊長様の御墨付でございましょう？　今は……あの御方の方が心配です！」

「判りました。では」

ここに来た時と同じように、突然、家族の居た景色が消えた。

再び見えたのは、離宮の職場でもあるリツキ様の寝室。

そして。

慌ただしい医師の群れ、だった。

１１　話　　騎士ギルディオ（後書き）

生真面目な大型犬ぽい騎士ギルディオ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6259x/

伸びゆく螺旋

2011年12月1日09時48分発行